古今奇談莠句冊

3117
1

へ13
3117
1 特
へ13
3117
ノ-2

古今奇談續編

第四冊

浪華書林　五堂合梓

書林 文田兵助

入江

古今奇談二十種は。近世の初延享の初に
移成しるを。頃ろ刊りて手梓を数ヶ元なもと
計るにしを出言。むつ乃まハ英と名称と
ぬりめる秋ハ志げくて茨海ありて。尚を
情ハ況てめるとを小なつきする。指枝の深り
も多く。梓の設と疏つ傷り思。梓する人の差へ
多れて。羅ニ。栄なし実ハ。実ハ。実ハ。
ニさよも所ぶを形ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
端ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
鏡言。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。

古今高談續編

萬句冊

浪華書林　五堂合梓

書林 塩田 忠兵衛

へ13 3117 1 特

入江

古今高談二千種は。近世の翁延享の初に
稿成るを。頃日至りて上梓を数年
計りしを出す。むかし乃ま〳〵ハ莫と窓を
ゆりぬる秋にハおしげくて薄尚
梢ハ況てめでまたをおしまする。指の
も多く。梓の殺を読み偏り思ひ。梓する人の
多れで。羅ひ。栄なりし実れとぞ。実は
こまも何ぞそ取む阿ま其。前
端をもよと托言す。思ひきや古
饒舌まさ此に與ること嬉し。猶

肩れて。古き藤夢への答へ。小蜂の麦乃さとこ。
のこの。梵典之孔雀の裏思ひ。鶴七夕の雲
浮る石之。ゆれを漣の文之せ使。人の樓
閣を窟ひ。球繩之及して後に大海ゆ教さん立失る如。
此る早く空言の魔を祈り。初み幸く後之甘む
ずる知つり若干尺之ゆ。を軒を為い渝して。
元の朔の作り国しるを屋人の習ふる。深山西
都の万兵る展なるは。大沖國社猫食の対
代を毒る屋れる。彼り三百年の前之。は年紀の
さへ行る知つりあり。深沼そして屋譽の思ふい

眠を捲りるとど。を風之諫る使くを祖言。博
士の思ふを洞うなるゆなり。さとば山矢を撞
て振ふもあり也。枝と系を撞たる偽言ハ。殺ふ人
の眠界差ふて地鎖ハ落ぐさ事屋。私
塚の後の冬之は。三つの伝を俱之男と為す
体種とし。神代の子社と系之黏りて繰を
り。蘇小妓姫乃巧今を宜色と為す。左間社
池ハ今採と河之ふれ。堤菜社衣ふ縄ふあ
る。人柱社経ふ嫌ふ。
吉野猫ハ係渭ゴ男多精を発ひ。野ら情を

面山巣精楽之漏さるなり。古人乃唐之華陽さる
所事。王住山の逸蹟ハ。むらし至地を閲しる
文翁の釈〻く徒〻きたる。徒陳を繼ぐ安えたり。
たゞ是信を言ハ陸沈ゆる反芝の自恐ハ亂れ
者多孤。心の使ふ小刈せむゆ言。花の山蕨
の敵ふを路をと知ん。歩ハ信せるさへや。夢を
精ハまて稿して。宮ハ食ハもる淵をもて。筆
ハとも探せるや。ゆ来後ハ生てふ名見。
天的爽邪孤十子閲吹題

古今奇談莠句冊惣目録

第一篇

八百比丘尼人魚を放生して壽祝益を話

第二篇

小野阿波磨踊戯ハ磨て筆法を説る話

第三篇

遊路行者著

千里浪子正

第三篇
求冢俗説の異同。冢神の霊問答の話
第四篇
玉林道人雑談して回礼を屈する話
第五篇
絶間池の演義。強頸の勇衣子の智恵の話
第六篇
吉野猩々人間に遊て歌舞を作る話
第七篇
大高何某義を厲し累の石を賊刑する話
第八篇
猥須道人水品を辨し五宜の音を識る話
第九篇
白分の翁運を乗して大に発跡する話

以上九篇

古今奇談莠句冊第一卷

一 八百比丘尼人魚肉放生して壽を益を話

壽福八人の廣家不書て保つべく招くゆべしとも先言あるは漢土の仙人と名あるハ家肉離を山に棲こ名山に入こ菜を採丹砂炼こ雲物採ひ樓乳を好む早く書生れ人を迷惑し秦の世に文成徐福の道士蓬莱方丈常世玉肉を求て東海に求て信を深くと淳ハ其國山に據こ人情海島肉希稀とるに因てなり。後に宗旨肉老子に渡りて渡りて道家と稱し。道場を觀と名づく。佛家肉寺のめし。住持をと真人と称ぞ三清乃像を設事。老子肉をとくと釈迦の奉に同し。法事供養を醮祭と唱へ神將肉の急急如律令ハ漢の世肉友府語なり。其作業に容殺を裝ひて棺実言裏と互違にするや。仏に西を往ぐきの地とる八日月肉沒る不に沒こ。道に生発肉そぶ故に東海を企事ハ仙に天肉ふ因肉あり。道家三清の

天八三三樂界ニ準ス。道ハ有と雖ども佛ハ会を示して往く。其有ハ為る
者ハ仙人ニハ仮りニ世を説くなり。そもそも天灵地の別所を設け。進達の
仙賢階級して多く不ス。そ道經仙籍ハ。古代ニ伝道場方丈八家。莊子蚩
尤の十家あり。石室洞穴の秘蔵ハ仙伝ニそ書あるも多くハ
擬撰なり。黄帝ハ素女ニいろうて。老ニ及なるものハ皆
仙ニ列ぬ王母ハ妖ニ似つ。浯揚ハ丙ニ似く。仙人の楼閣ハ画図を見るも見ず来
る。李白樂天のごひとしぬ新も仙伝ニ収め録しなる多ク。道ニ信る中
ニ葛洪洞賓思邈ハ博識ニして奥服の偉人なり。仙家ニ孫ク吳孫
撰ニ。却ク其人を疑ハしむ。そ人曷法八十一遠く去て師を見る。
托し。思邈ハ百餘ニして善行有れつニ遊ぶと告ク。ニそ絶島孫稱せざるど
宗ニ見れ常例なり。そして高の抱朴ハ言ニ云。知あるの徒ハ毛生を悪
まん用ニ者ハ室人ハ己ニそ乃を知て栄仙し今仍死せざるべし。世の人皆

不死の道を知ハ子孫の図城なるべし。忠孝を思ハず。必ず人倫を乱ん。
故ニ周魯寂ハ自用て秘して人ニ告ずと。是皆道城を張るの巧言。今
此ニ図洛神ハ本地を合るるぬく。其一見識ニて言及せバ言べくざるニハ
あ〻ば。三ツの教さいや。人乃建立しなるべい大道小徒共ニ便ニ成る。安城
行あるべきハ遠くあり。一ハせね不天乃なるべし。天道を一ツニ偏んと
せバ人事ニ妨礙ること豈ハ多ん。謂る寿ハ書生ニかまでも命ニ
得と不得とあり。福ハ功労ハ為て冨ハ成と不来とあり。二ツとも表ひ字
ら天然を失ハざ〻んニ百業ハ上ニ久しけ。ハ失期の妖と同るハ例
ハ名をおほせる徒人の故態なり。彼老子ハ道家の一流ニて言なく伝
て人の書あり。今ハ又千言ニハあ〻ど。古ニ青牛ハ大国ニ渡るど。神
仙家流ハ東方ハ福地を表ニ作さ。徐福熊野ニ留るハ由来起る。又本朝ニ
行う仙人あり。実ニ仙ハ〻ハ蟠桃ハ今の上座なるべし。人九皇

都良香も収つゝて収よや美つゝ。法道の行を乗をい生、玄術あり。久仙の雲頭を蹈るとい道んれ肩を弛るあり。足等いとゝに仏教行の不可思議流して西王母の派脉よいわゝぐるゞし。そつよ飢えゞ寒ゝぬ乃幸えい衣食の欲薄く云えい離ゝをつよ服業をけまゞも病なく。滋食せ○ゞも養ゝぐるい。足ゝそ地仙ゝて楞厳十絵の一つなるゞし。人の言を信ゝ〻く人を嫉くい多ゝ若人なゝ。冬ゞ〻夏暑ゝよい行ゝ耳を側てん甚い欽明の御字ゝ〻。若狭なる小浜の漁人朝夕ゝ往来三方ゝ海ゝ。ゝ方吹風ゝ放ゝ〻ゝ方格を失ひ波ゝ浮ひて三日許の後一つの嶋ゝ飄到ゝ。岸ゝ上ゝくいゝゝられ小家もゝく。海ゝ陸んて鱗を守る大門巍然ゝ。海を生活身の放ゝ〻ゝめゞゝ島〻も少ゝゝゝれどゝひいでゞ。彼竹生島ゝやとゝへゞ。海路ゝなゝれゞゝゝきゝいれゝゞとゞなゝゞず歩ゝゝれゞ朱門碧瓦金字ゝ牌ゝ少女宮の字あり。一人をゝる結髪

北浦

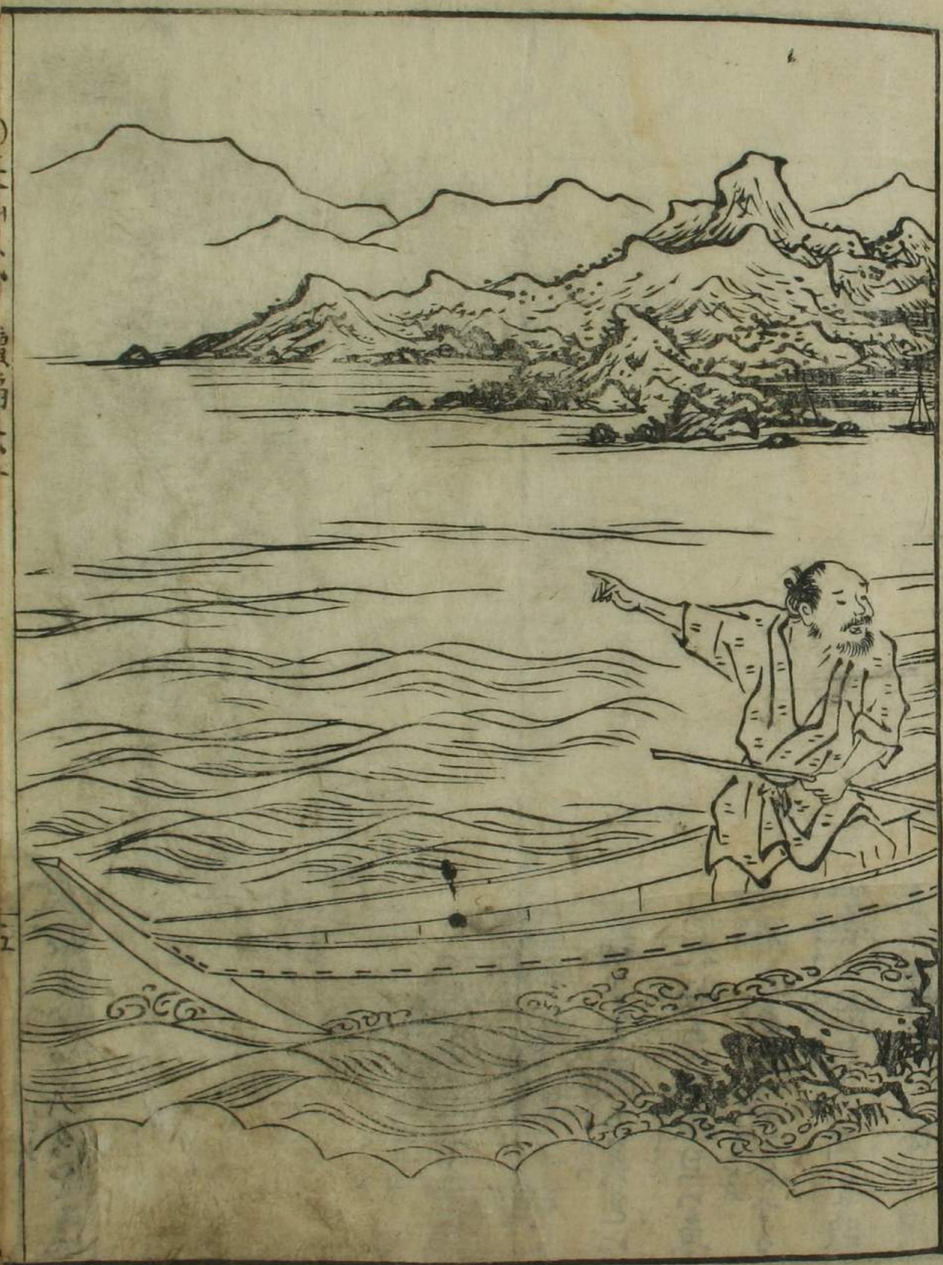
ゝ上ゝゝ遊ゝ遊ゝる冑ゝの一ゝなるゞ。漂着を怪ゝゝく楼門の内ゝ入ゝし。一殿の結構磚梵玉のめく。水草の文玉鏘ゝ。五采磨玉飾り。万像を鏤む。飛禽翼を張ゝく遥ゝ上搨ゝ翔ゝ。美ひゞ老の念ゝく。竜歯舌玉吐ゝくゝる。危樣ゝ相逆ひ。陸地の忍ぶ。千門万戸荘厳一れ。ゝゝく一境諠色少ゝず。漁人競ゝゝて階ゝ登ゝゞ席ゝ。食膳玉ゝ象箸玉ゝ把ゝ玉椀乃内玉ゝる。犯美ゝて人肉ゝ似ゝゝゞ。漁人許ゝく箸を下ゝ。かゝ。危人とゝしゝゞ。足ゝ人魚肉ゝ。翻放ゝて心臆を苦ゝめゝる人足を啗ゝゞ。力常小後る。ゝゝ島を刪隠の乃ゝ示せと。漁人少て仍喉ゝ下ゝ。そ番玉ゝゝゝく吸ゝく粱飯を食ゝ。肉をゞ包て懐ゝ。風己ゝ空ゝく恩を謝ゝ。舟ゝ回る。門老送ゝ。て舟ゝ向ゝゞ方格を指ゝ。者ゝ漁人を招ゝゞ方玉ゝ。ゝて後をかゝゝゝゞ。其人氣も高ゝく。ゝく溺ゝる蒼海を際玉ゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝ。

風よきさがひ浪よ托すること三日ばかり。天は沼ふ幼やかなるとそよも遥なる雲は浪よ呑ぬ。是こそい遠敷は死なり。ふと初てようと逐ひ出て

まそ〻ろ涙。家よ帰きび妻子遅迎て悦よ報よ。飆風の強はかり。慌の肉を出して是人ようといよ。はよ女子は十歳なるゞ珍味として食ひをす。能喰うと與して事るぬ。女子其はよう漸〻と健よ病苦は覚えぞ。心意快稀改るゞめし。是なん年長ぞるれ兆とろつ。北とせるまでゞそ嫁しゆくこゝ紛きゝひ。漁人既よ百歳は法い姨と呼まて。七十八十ふいるまどき城人ぜず。面貌白皙よ清〻なまど。艶媚の婦態あることなし。日〻にまそ〻清潔を好こ俗塵は厭よ里人目て白比丘と呼よ。時改きどき身衰へぞ。寄ふいろうてこそ幼年よ父乃ち〻仙肉の語ようとろひまることもあり。延長三年醍醐帝疱瘡の御悩よる験の者よは祈り祓食ぜ。比丘尼ゞ除接の符よ。若狭ち四百

歳の女とちろといるる斗は生れをも教へぞ法い住居定めぞ。他国よ行といへども常ふそふよ在るゞめし。そは高演まて是魚の古人ばろなる城はろ。其頭は人面まて眉耳備ち。肉白く髪赤くぞし。紅鯖の間よはわ。指よ幕蹼あり。下は身い魚形なり。大魚よ逐ま〻と是こそて。嫁辺よ潜こ清湾よ泳りく寄る事は

ひぞ。漁人水中よ能く網は生き入まて圍こ飼ひ。魚は〻は水ようと出し涙はなき恩をそよ似ろう。漁人等云是ぞ〻人魚なり。喰て長命を保つと宜く。肉をかち價をえる〻青ゝんと人かと募ろ。冨有れ家是は貧んとるよ別ぬ食ふなきべため〻ひく。白は丘尼こて人魚服〻とと人ぞ。彼人よ向て真偽を定めては貧んといろ。浦人は丘尼よ告て。肉は分ちく寄〻せんは定め給はきといよ。姨姑は仏の戒禁をちるまもあ〻び。幼年よ食して味もとれぬきび今一〻び食せんこは〻ひ。高



濱よりうてゐるに。此魚深躍り跳をさゝげて姨姑よむかひ濱を落を事珠のゆし。姨姑むよりゐ母う。此魚必ず肉はゐたきん憐むべきことなり。地仙となるものい一千三百れ居事をなをと吟て未ぐ絶さず。我是を食ふとも究て年を延るも知るべゝ。いうまゝて放ちゆきをんと。浦人よ向く云。我幼少の時異魚の肉を食ゝれども。人界よいまゞを魚をゐず。名はしゝ知見なる多ゝ。山生とよぶ魚鯨魚なり。を微小なるい守宮よ混をやを。海法師い烏賊乃魂よして脚よ多子あり。鼈れ入道い鰒あり。今此魚を類して図ち見せば色をも人魚とゝ皆去れ獣魚よいあゝ。但し鰒よ牝牡あり。晨旦い魚れもむと河海をゆゝず。海辺ち人牝牡をゆて大池よ去ゝ。交合すること人のゆく子孫生ぞ。此魚ゐるに牝なり。九服食い牡雄の肉よ非ざれい益なし。味も美なゝば。我い食ふべき念あし。浦れゝ必ず用

ひ殺さい牡魚捕ゝ猖獗ゝ。衆魚を駆やりて大よ漁網の害を免。近辺の濱困窮よ及ぶべし。今此魚よ托へゝ此浦れ漁利多ゝ。しゝて放さい却て一郷の潤色ゐるべしとかゝる。浦人ども且ゝを比依して。仮ち魚よ向ひ体を放ち母ゝ此不猟れ利多かし。むるやとゝ大魚ゐを出して去ひ躍ゝ母ゝあり。やゞて図網を去てけさい。よく深刺とをゞうて深きよゝしゞゝて浮て此ゐさゝげ浦をゐる。已ゝてを月よゝ此地の猟業大よ益ゝ。浦の人八魚小松原の異折朝まで多ゝれい。浦人いよゝ此丘尼よ信をなを。姨姑い方の幽沼よ草舎を造て棲けゝ。を此の恐あ年の暴ゝるものゝ四人密よ計合せ長生の人れ人道いゆゝんなる試よゝを此丘尼往来れ道よ面て常よ何ひ等つ。一日果して元とあて大太ゝり爽を抱く。此丘尼新も発ゝず。面れ服よ挾てゐること疾風のごゝ流星

れ悪少追へども追及ざるべし。此丘尼為人をかくなるべし海中に死入
俱に沈えて又えず。実や大海死尸を容ず。明朝亟サのあ尸を干浮に
お峯う。悪少の家より守護に新に出るに及んで。尼姑いきのこもけ
ふも庵に静坐して養うも是を知らざるべし。謙をさぐり問ふに新
なるべし。此丘尼に同窮むべきもあるべし。後も亟サ等此丘尼に害
心あるべいきざる様ちさ所に白此丘来て挽て海に入る。し故に畏て
仇するの所。背言して謂人あり。世に安作に魚類と脩妹久しけ
れば尾脱して鯖鯊為て人身に化すといへり。此丘尼即ち人魚の精き
ちやと雑作をもど徙らるつづき。百年に幾ばくして後碧砌帝南朝
の号謚を受て。苦符をもし時の帝謚に因りと云ふ。四百年
い強うと人も知り。此時大に信ぜざる。長生の仙得を問ふ人あり。て古
老君の言に谷神あり。谷神不死と云ふ。是

谷神不死と云ふ。是の牝と云ふ。姹姑云。老君の言い学ざ
るべ我ちゝ。山谷に無動れ抱人身い活動の抱。人動ぐるべい腐せ
ん。谷い抱を容ず。谷神とは神を言ふの不谷神とは神を言ふの言ふ。
忘れたるいわし。神を言ふれ外長生の訣ふし。俗人の死ひとも人
れ死ひと表程をれば。生生ふるも法是に入るまじきなり。我は浦
に生れて網に禁おく禁網ぐるの禁い利のあるいわ。是をもて法
の豊ふるを知る。貧國に福地と指て。人生ながら仙人なるべし。
を絶ち仙居いられてもあらず。但し我のこなる法生れ人
い性質に別わん。無慾に仙食丸を服するも因べし
ずとも人ぬ。小涙の地震後のに苦に掲ちて
紛人常に掲げて涙。是に石を架さんと希へども屑易ちぬと
て久しく黙ぬ。姹姑作人に云て云。我れ尚の石を定めるべし。日並

なきはよ沈よ載て架べしと。こゝまで我実人皆戯言とそこつ。此地を去ること四里ばかり傍く和田といふよ平磐の石あつて望玉ち。姨姑常よ坐して抱し。ひを地よ叩きて訴不あり。近きよ住める人も故を問へば。何ぞも苦んとそこつ。此石能言ふを言よ。亦此地を奥旺あり。きめんとそこよ徳れ居国ふし。我を捍去く小渡の揭波よ架さば。そこはられ行人脚を湿さず後来よ限りなき利益あらんたある時此変福地となりんときこえしう。法人方便をめぐらすべしとて人々の動くと常よ把定なし。和田は土人此丘の言を信じ即日石の下よ群り工夫を用ひ引めらし。送石歌よ力を合せてあるのるよ小渡よ移し。彼流まよ架すよ。続く適るらところる。姨姑悦て我教石を載て逆よ小わくぬと戯れるところ。此丘の孫を知る人なく。手摸とこの密高れ跡今もあり。長生彼がめさいそれ久しけきい霊あるやを仏へ知るべ。古くひきりと訓せるハ。秦国の餘風なり

二 小野れ阿津麿踊戯よ磐へて筆法を説る話

草體の假名國字となりて彩るやを仮定なることまれ変まるべし。往古遣使よ奥へて把をびよ唐ちよ入りるを。教へよしと我勝よ言るあれど。此大国の彼ちう勝めるよ小事をいく論すべるん弘法大师生貨の能書よて。彼土よ筆法をひるるい殊文なり。世よ之跡と並べ称るい。皆絶倫の藝なるう。別て通風るるりめは高名よて能せれ人られを志ひ中法よ小野と名のる人形わし。へづき徳ある人の氏族久しきい。血脈のくよいわじ。筆の上好める人の語きしるあるひ。繁栄の地よ。小野静去として能せあり通風の正き筆を指。筆縛よ嫁よ。一揮三五字神勢を失るべ。漢土官

府署寺社古法を能学び是彼友の法則とす。をごろ古今の能せよ
教へ入ごさい。脱山人彼とと評ちるも是誉にハわゝざゝし。それが弟
子ゝ丘下阿弥磨とて女等あり。性ハ筆墨れ巧あり。教を執て絶ぬよ
いる。女流を師として学ぶ人柄よく心聡く。其人の学ゝ應じく鑒
能ハ以く学ぶ。[illegible]ゝ人をそやを。そ門ゝ市彼なと。常ゝ弟子
ゝさゝゝて云。おのを若さ折ゝらゝ山道の妙をいのゝ。ゝ島の社ゝ系統
す。通夜の若ゝ白日とそゝが冥くなゝ。ゝ同ゝ忘ゝゝを蛇龍動を屈
曲して宛伸を勢ひ宝能ふく。其状眼ゝ宝るとわゝつゝ。已ゝて晴ゝ。
鑿辺結ひゝる神人出まゝて。筆れ見ゝるやと問ゝ。ゝんゝ敬ゝて云。
畏怖て又宝めゝるゝと答ゝを。神人云たゝんゝとゝ。そゝゝゝ。ゝ
れゝゝを学ゝゝゝと又を尾ゝゝうねゝ。伸ゝ屈るの勢も息ゝゝく。彼宝め
がゝゝ法相の妙を立夫をせゝと。おのをはゝゝゝゝ。彼偶龍を表すゝ者い

よく余得して今又ゝゝる勢ひをなせり。形容宝ゝゝざるを能とそれハ初
ゝ法をたゝく学び。後ゝを法ゝ細めゝれぬハ成就をゝゝ。今其法を
ゝゝ〜めゝゝと拙〜ゝ。ゝゝゝ神人袂ゝゝ大の鱗一片をゝ出〜ゝく。
を是ゝゝ根ハ平ゝて丸ゝゝ似て積土の形あり。是を三稜なゝ
りのゝゝゝゝるが法ゝ。淳れ蔡邕楷正の字彼工夫して。石宝ゝて異
人ゝ換ゝゝると托せ〜も。素悟ハ方正ゝるれなれハ。斜角れおをゝく学
彼下すのはゝゝる。是等ゝ倣ひ。後世ゝ巧者の人擬造して。規矩れこ
折を偽ゝ。図ゝ正中ゝ三稜れ規彼入ゝく三ゝゝ断〜。内の斜角を楷
ゝの法ゝ〜。かの三物乃一物をゝて学ゝ法となゝ。是即ち上代の假名
法ゝ落荷として蓮の花瓣の散て。其窩ゝゝゝ新月のゝくなゝ。是
を幾つも連ゝ續け法ゝて古人の字形をゝゝ。本原ハ皆ゝゝ
一〜。形似をまなぶゝハ本相れ能せゝ三跡ハ文なゝ。兼ゝゝゝ因ゝの

んもくまんにちきこゝろ筆法山寺れ行成なるあいらほひ弦よ似るも及いぬ而おほりんめり。文字きゝゝゝ蠻夷も法ごと事疑ひなし。かくゝ云我い体ゞ愚なる幸魂の神徒よ影かゝゝるそと示されてゝり。歌よけ言ば忘まず。好けるんして奥じゝも笑ひも志ゝりんと。常よ郭元せり。其門よ業を受る女師。多く小習姓を許され。聰とほひ通と字り。遊者の野風い雅名なゝゝぬ。ゝなどゝくゝ古きびて。よ一孫の教へあり。そべて み字形美よ偏きび筆勢脱け。魂よ偏きび欲とかく。一字れ内よ義魂ありとゝも辺と魂よ。旁ば丸ゝなすゝもあゝび。義魂を互よ筆はせて筆法よ流ひ字をなす。みい易くして勢ば失ひやすく。魂いなしかゝゝしてよく丸象ば書よ。一字い義よ。一字い魂よ交へさまやとんえ遠ひゝるもあり。色いゝたゝくの偽名い筆絶れ字まて。片假名よ対して丸かるともいゝ字の内れ筆まて。筆絶をんゝぶしい字形よ杜撰

あり。字形をいそ字勢ばゆゝれば義といべゝび。字勢の活動い。けば部郡よ踊りとゝて戯をゝ行ゝ。見を筆跡の態よ習へゝ田ふゝ起うて森の畧といど。恐くい森の溌舶なゝべし。嫌ゝて書よ言ゝも吟ゝぬ国秀ゞ。家ば志ゝて邪とゝけびいまど字もゝいねど右りゝいゝ字を端ゝる筆の家筆よ脚ゝて。ゝず参ゝ考よゝゝ。分いゝゝゝて筆い一とせたゝねも。腰ば斜よ振り。双脚を外よ端出す。しゝか是ゝるはゝも積拘ゝを失ゝゝる也。野なまゝも義と同すべし。それも一場一用西の短句あり。栗田松坂も越ごゝ也篇あり。先ゝ帳紙の廣狭とせごゝ字の大数を紙筆て。ゝ一切の踊りれ後急よ役合せ筆と執ゝる石精乱ば張て弛ごど。精乱ゆゝまゝる時い。間よ一度二度点迹乃拓ゝよ考ひてもん脱をゞし。精乱裏ゝびゝるよ堪ゝゝ。たをきすちとゝゝび右を指し。ゝれもゝ収ゝんゝていたゝ出ゞ。一画をゝゝて後ゝ一画

を出さゆうとて。老年れ態まて廉角しくれば。心態いとをくめい足随てすこゝを退けば脚はをく近くい辺旁れ分ちなり。まの文るをたてうて。足の強弱人目を遑あゝ。さるを足の流まねゞとき。其ゆゑ
ゑよいうていい踊りうえて其人を志る。腰を態を生をるい娼伎を流きて雅を失ふ。字れ腰といゝづき程のすいあり。筆れ腰と人の云は書まれ與ゝねすなり。左を先をすいゝ大の類あり。
田舎いゝ芋より拓ゑ三ッをなく学を打を度とす。於今の地は態度俊ふ柳揚義。三ッ四ッれ向を忙しき活あり。左を巻嵐し右を巻嵐すい横公連先の字なり。を尖を一ゝび拂ふゞ一度あり。拂いぬをを同し。文字いをき綾をも。徐ある筆ゝ。三ッ四ッと拂ふ其を付をゞめても。ひをを節度を含て勢を脱さず。大娘劔忘のたゝを外ゝび。筆紙をすの像を義画とをうあんや。又撃あゝ人の

已を一刀弓をうとも。狂鋒を利ゝに構て足までとゝをくゝ。ゞゝぞん い象ゝひも斬ゝきひて。劔鋒を多んを振ゝず。茶理を弱ゞ人の。
脇さ茶七を手ゝさゞめくゝえゆゝを同し。亜画ゝて字数多くをも。そ
姫の右を拓ゝ左弦拓の所ゝ立を必りて。足端なをすひをくゝては字
雑退ゝゝゝ。多ゝ出い迂闊ををれば。先をゝをゝ字邪を勢を定められて。
立かるゝをふゝゞ紀をもあり。それ方を巻帖條幅。屏障巻文をゝ
ゝて。自然を序破急れ体出まりて。中程をい拓ゑも約束をれをつゞ程
の所をいゝてゝねば。を人ね無の墨ゝ。足ゝ出ゝ。発異ゝをゝ。そゝ出し
筆ゝのゆゝて。踊りもおのをゝやゝ田舎姫れをゝ知ゞゝをいあゝん。又
連綿とゆゝ。板を沸む下ゞゝ。拓ゞゝゆゝれ好ゝ写ゝれゝゝ龍ゝ
成ていゝを穂の甲斐をゝて。ほゝゝいゝ拓ゝゞゝ筆りてゝゝゝゝ
ゝゞみゞとあれいゝゝくいゝゝゞゝ筆もてかゝゝゝいなんそよゝ

らんとのよう多あるてよく出るるいうくれ等清てんゆるも今い
とくひとう並べくんまべ動て出る所あり等分遅るに弟とてりのあ
りて。中所い離れて等ヨい続くくる所あり。彼幾頭れ屋伸ると縁似く
るかくちあんと。大氏示すとと疑あり。ハと用くるとくてくるりのくふ。から
て久しくはめき行りまくるど。年も積りけまい。左射も厭いしく。今ハ
故ヨ泊りて乙半ヨ生残逐人と。見れ門弟ヨ辞別をなし。親夏を
知るんヨ四ばりあて。饑別の宴り拙宅ヨ充くるそまハを携へて。居住
を辞し。婢僕彼是随へて発足しる。近江なる日野の産なまび乃中ヨ
て義法と近江へ岐ぐさを鳥次郎とい駅ヨいう。志なくく午睡せ
んくて序風ちつひて所くう。球のヨはうつりけまい使女ゆくう陸さんと原
風のかくう。何ムかくくるくるヨ。舗舎の音くくくて。寝くる姿常ヨ
かくう耳鼓さに来りて。ちくくさまくなれ若をなて是を告げ。怪し

くそむそめくほどに。ハはは鹿目をさまし。やがて素足ヨて浪ヨ出そあ
くうれ竹藪の中ヨ入り糸も見けしくう。藪の内を探さど目ヨくる
所ふし。そ日暮れども泊り来ねば。指てもくく日野と中ん人嗜起
きてくくみとなもそ見ヨどっまくべれ家も中法の人もふし。かれい
ヨ配ふして離義しくるとくなう。丘ヨ首をるの中末を失ひず。かくく
も中邪を現せどんば流つる姿僕等人の粉を蒙らんを言くくや睫状
模て焦頓を容ることなるまを。そ拙くくや尾を霧て不打を求るるん

入江

草地

古今奇談英草紙第二卷

㊂ 求家俗説に異同家に神霊同答の話

扨津國に菟原とも菟苓とも呼るつゝ。昔より求家とて三ッあり。同名なり。住吉村なる求茅渟づゝ鬼だゝともよびて男とす。鬼ハ男にまがつるゝゆ。東明村なる八只多女家とつゝ。味泥村なる多女家に菟原男と。そゝ家に狀茅の方長く出るを俗に車だゝと呼ゝ。馬鬣封になぞらるゝ轅に家あるハなゝん。家の置るゝ多東に住吉ハ西面し。西の味泥ハ東面して中なる東明に家ゝ左右より拱くゝぶかし。三家に同お去と各ひとしく十牧町一家に周廻住ゝ各八十間に上ゝ。上世の廣陵乃荒るゝゝ今荒るゝといゝども未代に名顯るゝの説あゝんゝ。古来文人墨客住ゝ接て藻を作ゝ。葬に多のうなひをゝあに奥擲と詠しゝるゝ事古ゝて物語に柄となるゝ。一ゝ七丹兄の中世に伝某なるゝの友なる

関の伊勢に速て高沙汰辺を遊覧し給るごとに世の中の陵を憑
勲に拠して忽ち貴氏独言常ならんこそ家庭ハ棄戸の
地にして氏族恩義の外ハ与ずぶる霊社ハ別ふして日夜撰て
祢を降し祭礼を設命れ日さ人ずつ是祢年人の家とこそ中聖を
言に對して云ふ如何なる者人の法ぞ関云我も知ずぶ云ずして
伊ぞ人を咎る云我ハ此男に拠るにより降る家れ祢なり云始
ハ稀に此家を拠る人あるが為に降れて我任とこそ先つ遥の
海島より我を降してかゝることのそなり彼祝詞に云ふ奥御ハ饒速日
命ぞ地ハ子孫代海の伯として家代占祢に従を認てはず守と云ひ
住吉と名づけ國社在す茅渟の玉出に向ひて共に海の幸ぞ多ぶ
遥に祈りて海利を家ぶ今此に勅信しなんとして地勢を知
らず家れに祢を清まつて地の家代交て山水似る地を撰んで徒営

を志す者なりと告る是もまた幼きを紀故に求家と云類うと人に
接して向ふ人早ねと云中聖云ふ遠を不よう一つびも信
未ぞ祈りて加護をゆることあるを答云凡そ祢道ハをさきに通路あり法
れ弘まる不なり此格子れ外ようそ信ハ義べく内に仏の足するとな
くして霊験あることそいとくもたくとれ今れ白幣ハ供拠して服装
なるまどみわを忌田なるの供へてハ帳降る時祢の嘗のようも御し給ハぬ
ども御ら偏に定め侍ん是即ち祢の義る降りて来祢を安んじ給る
れ適なりとす中聖云祢霊祢孔さどんバ後ハ田に郷まて平地とれなら
ん云ふそれも昭穆のまを忌に入りて八千家さくなりぞ楽田芝海の変
土地乃沿革ハ注をら恨むべき家れ石に種を房ふる祢いかゝ俗
注るまどに家れ祢ハいそで忌好らんおほぞ知るりの貴人四討もとひま
らすあん霊ありて降す人者に絶ずとも祢ハ牧くに各ふこそ降め

とかうて地よ伏をゞ時うして笑ふ独言の意答を為人後ひあひて。
我らひとりや出ろんと亭物ぬるそひ里よろうてくゝもかうぬ
吉さうゝれ

たまゝひいをつきとも
かうこと八声もなく香もなく。ひよいそぬも後ろをとめん笠の内八汚色
財乱よりの事こそ。惜も興もおうこゝひをもそひ初ゞさをむし
中の家ちく富ろくへいろなる古法も知ぬよ。亭れをゞんゝて又
せろる冊子よ。むゝはの函よ作る人一人かちろをあよはひろろを
のこ二人ゞち志ゝのまろるよわんとろくど。かゝちもよそひも吉なる
んもゝ。おうなく。おやなるもの定めろ。生田川よ深ろを射あ
てろるよわろんと約もろるよ。ふろうしてはゝちれ以と尾をいそ八れば
女ろひよゞゝひて。名のゝ生田川よおちうぬふろもはゝ不よ洗ゝ

一人八足弱る一人八よ弱ろゝて作よ孔ろう。男れおやゞも来う
て。女の家を中ゝして。た右よ二男れ家を造ゝし始終八いつ乃世か
ろうもさゞろあゝび。伊勢乃御のあよ
かげよのゝれれトまてわひんまとゝ五なきかゝハらひなろうろう
け客人わすう乃行ゞきろおけゝ昔ろよ邊なゝと。隣不者と大思よ
海ゝ人して

をゝひやきけよさんきろろの酒むうれをとあふゝバぬう神
よ古き法ともる旅人ゞなる味泥の家よて因れ時よちろ人よ同へゞ言
ちゝゝ我いろうへといさなひて。僧法さんよ昔とろうぬ。式弱家なる
庄友の女子ゞ女とハいまゞ人をんゞろれ名。二七ゝずゝして国秀れき
ろえあう。父母秘乱して深国狂いゞきずといへども。音よ少ゝつろくも思
ひそめて。け家よ壻となろんかの家れ嫗よ金へんとよろうきと。或ハ

家門お高らそ人品お厳す。年月往ゝ[illegible]て。氷れ上下より統合そろ人乃種を搗ハさらく〳〵たもとめて。礼を誠え恥と捨て筆ゑ托〳〵書ゑよせ。思ひて彩るそ[illegible]れ人の。めづ〳〵れ人ハ又ままゑ又ずすれ立つこそ拙くろハ〳〵。芸ゑまゑ子佳人れ常ゑをくて[illegible]ゑもなさハそくせいうふとゑびゝかゝんゝいまくろハ同様うつせハうとくなるべゝ。牽も桃もあゑと投せざるハ。一日ようゝいろひなんをね。ひゑ守ゑの故事ゑ競さをいぶざる様愧と。恵といゑ影同の表ゑ立てろ風乃。深切ゑひゝ〳〵すゝあるゞ雅なゝめどゑ。ほゝゆゝる拙様羽て究ゝなゝ。設けて色廻歌ゑ入って出て因様明て見つ。ゑゑ向ひてもゑハ一筋ゑハあゝじゝいだき男女の時るゝるハ好まゝゝゝるねとゑて。茅渟れ住吉なる男ゑ女を恵ておゝゝゝゝ。許人ゑあつゝて艶ゑと送ゝゝゝゝ。ゑも佐うゞちゑ夜さむさ法。菊れ樹枝ゑ佐ゝて住吉ようと。九くむゝゝび

てゆれ字ゝて結〳〵なる様ゝけハ。むゝゝさゝれうすゝゝゑをかゝゝねてつゝゝゝる中ゑ。ゆ〳〵ゝゝれうすゝゝゝゑをかゝゝひて。斜ゑ百をぢゝ引る下絵して。第だてゝるハ〳〵。身をきゝでなゞゝるゝゝれ時佐ゝハ純の波れ来の水ゝゝゝゝとゑゞげゝ〳〵。ゝゝき身なゝゝもたゞゝゝひてゝゝ。社世るらでハいゝれゑふハとゝゝハゞゑゝゝゝゝゑ〳〵〳〵。牽れきゝゝ。今ハ系身ゝゝゝゞむゝゞれ。おすハゝゝゝゝゝゝゝ。倍ゝゝゝ流ゝゝゝ保ゝゞ。様の藻ゝゞもあゝれとハゝゝゝゝゝ。女も與ゞゝゝけびゝく公いでゝけゝゝゝゝ。ゝゝ「紬れきゝれの水ゝゝゝとなゝゝゝゝハ。雑不ゝゝゝゝ〳〵〳〵。ゝ雲の面ふゝゝゝゝゝゝハあ〳〵すゝんゞゞちのゝゞゞゞハ拙ゝゝゝて。計ゝゝゝゝゝゝいゝのりすれ入るめゝも深ゝの根なく。

あすハゝゝゝれ岸ゝ佐ゞゝゝも。不ゝゝゝて行ゝゝゝ〳〵みゝなゝゝも。おゞゞんの下ゝゝゝ様あ〳〵ハゝ。又ゝゝゝゝ堅の枝ゝつけゝく。ほ〳〵きのゝす

えふよさそう。「あハそのうれしさとぶにてとらせのふのちれるらめ
ハぬきてとそまろうめぢさなうぬ逢激ハあすすおぼつうなくひんば。
おハでれうのあとなうてもわんとうて。ゑうくよまづこかひさ数
三ッせ川。滝の水尾もなくるバうねとせなぐ事すうて」。乗女と言る
いどみようぐうされてぢわよいくよとおまうせられバあけばのわうう
筆を脇でいこれ川とばうあつうかくて言伝ええず。父母ヨヤ
て遠うびうなうるようひうてあ汐とてのいんと待ーうふ。ゑるヨはー
菟原よ生田ゑ為て日どる庄日伝来那家ヨ婚を求ぬあヨ娶ら全慇
懃をたくー告求む。清きる百の家坊あるヨ仮うて。ひすめにかくとるん
告る。乗女胸さるどて。ゑつざ家ヨ茅渟ヨ告知ーせられバわーハヨハそ孤
ぬきてぐて。先ヨ壻うんと言よううる汐。再ひ起ーて家ヨ娶んと使を
いくゑを求む。夜方の切ある求ヨ。ゑれ翁いづきへもあー。ひぐで。家業さぐ

きてぐんヨ許さめ。射藝汐競て宮めんと日城約ー。生田れ川ヨそう
張ー。あの男そきくヨ裝束ー弓とう勧おひて。水ヨもゆうもの
ぞきんとうむうひ。ささうひて待負と試ようる。菟原れ男の射ようる流
鴨左ようう右ヨ射通ーて正殺の矢目も正ーきヨ。茅渟の男ハ目前て
のうを射抜ーて大ヨ恥ようる退ようぬ。かううれバ父の翁乗女と菟原
ヨ許ーぬ。乗女ハ家ヨあうてひ。ひ待負ヨ狗ふうれ茅渟れんうて第ヨ甚
舘あきバ。必ずとかちなんぢ。ゑるうこて心汐ゆう。国ヨ合んぞ。ようヨ競
つることハふうねまけあきバと。千ヨ百ヨ念ーうびるうヨ家れヨ来ー
てうべうハ菟原殿ヨて待ひねとヨ胸たぐふむ方なくうちたくの
れいうヨせんとうひうぢうひ。ようくヨ父ヨ信てふうび競ハせんとるん
てうあんとなうさうむヨ新む。父ヨうてうばうヨ作ーね吉日をう
らず告んとて。乗女母て我家ヨ入ー衣ーうづき後ーうぐめく。その

事ハ挙るべからず。今やその能はぬくなるず。人の心巌の堅さとおもはゞ。蒲葦身も紉て縄と為かくし。過を家所を我と云ひ我侍しくる罪を我おひて。菟原よむかへられも。かれ鶉の中に死なんと独りちなきて青鸞と捿ざんハ孔雀鳥に飛んの楽しことみにぜまうらう。母なるりの乙女の深き志を哀ふ堪りて。いかに安きむわらんやかかこぞりてひそまつられ。しらべ天台より下山せし苅萱法師。言れ名因性幼名に伝まり池丸とよび。気力能豪毅し大石と飛し大木を抜き。時の意気に遣へバ師その法師も否なくきられバ山に流一致して遂ひ出しやる。筑紫へ還らんとて此所に経歴し一宿を求む。則家の妻ハかるさひれ身をきバ俊ち謡ひて身くへ入る。湯を引せ點心能をもて設ひめてなし。是怨敵除の祈りよりと供喜をて。此僧肉の守れからひそてけるをとりんで。いく日れ前に物寂の人ありやと問ふ。母氏つくねて乙女が身れ縁

七　北榮

をなくる。僧云茅渟の男家の才能ある。未書を讀んずるといふ。その女形ハしかとをえらくに出る。上がされあることぐしと言うらもあり。荻の葉なりバよかきしもうぬ。貴性一類して足を知るハ実に其人乃自筆にハあらじ。此ちよ人技庭ひくるも。是等き人乃黒色と拘るに。まく人もまめにかるくこそ。文の記も十なさる綾衣ひて肺府より出るくもりんしむ。其を求る和美色に非ず美産にあり。俗情経済とよすべからずんと云。母氏いて才幹ある人をえらび。茅渟にまつて其人がるを窺ひ求せる。きさいいひよりくる茅渟男にハあらで。子も家の仲人にて。お身にふかくて適ふ女郎きくべきにしらず。人の家に婿くらんと欲すれでもいまだ其家におれるものあらましなから貞性して去れバそ此意色にありすのあつかり。閨秀れ迷ハさるるも。ふみんなきバ。茅渟の男ハ我にまつせなへ。来るハれむしきとてすてめとぞいひける。かくて茅

浮れ男先に趨て奪ひとらんとすれど薬を捍せまつ。今穀を通にそ
くるせ。獨自一個ひそかに女ハ許にいたりしが障子ハ下にわて。さ
すがにはしくも内に出ず。独ハかり出しから。始より一間も見ぬとなんぞ。
使女にのけがのをかざり障子縁陰てかくれむ。浮浪侍にわりて年をも
ておへてらくへきうず。男云今日ハ身を互へかてぞ。八戸を窺にそ
めんと畏す。法師太に発化て怒るさ何ともあらバ。彼男をやあやまらんと。
紛人ハ肝をひやをば。法師居へていそしむ。此ところ什に穿に心身每ふう
たく一かとあらずと今より恐る海陸の言つくも起らんと。男云それい
さらさひあるるすなり。楽ぶるにいかつで。逆さるにいよやをし。女云そ
をい逆らい人の身にさぞなるがかしからんざるとも二心なき誓の文を
今ここにて一段うらせあへと。文かく四寶揃へ出し。抱てさうら見せ
バ。彼男俄に赤面して。二度ハ誓約ハせぬ抱よそてと身を退ぬかなり。

女云是厭事にはあらず。今まで通ひ給ふさ多きを探ぐ知りぬれバ。招きひ
を願ハまでと強て乞ふるに。是非なく筆に信て紙を染る折人来バ今
ろ数々の通ハし文にハ墨さへ似もせず。詞さへでたらず。かんならも
らんバ果して最初ハ人にもあらず浪の後に説を以て彼に對し。使女を
代として。わざむきぞり。かくはかんなふ乃ちしてもがきするもの八按摩かふく
るにて今にあるく八。因果の縁とさかなるべきさん。人の紙かくまでむひて
愛せさせ給ふに。此家の難ハ是までなりんろ。彼ハ風流縁業今や殺
生に及ぶぞと独を拂ひてきりをそんぬ菟原男ハ女を芽渟に
きぬと答て女すら浪形の乳れ親をまでうしみ。芽渟男が互へかると
遂ひのてお家の松原にて及ひつさ仇をきんる眼ハ別にして。遂恨や
かく。やがて刃傷におよびおれおしてはしく斃ぬ。薬ハ中に往かふる
使女ハ死をのがれども薬て夕ごくるを自ら悔えられハ。遂に住吉川に

投て沈めわるけ揚てわげく。三家ハ旅おもろうて。二人の志えろう心
づきよけるねバ。使女を古さとれ東明ゑ陸こ。菟原男ハ味泥ゑ埋こ第
湾の男ハ信者の家ゑ家せろ。乗女ハ志と失ひ三死ゆ殺ゑ紀ろと繋
を切くくゑ遣ず。さこ家ハ排ひちうて鳥ゑ。ハ取ゑこ家芸ゑ生女
家と成。そのくくハ衣服を刀やなぐひまでこめて。家ゑも限りの竹ゆ
ひてぐれバ。茅湾男ゑセ来る時あうてもかきゑ負ることなしと。倦ど
かうて。そ尾も幻ゑ失られバ。其家ハ霊あんとそを第ハ成ゑ

ほのれくくの木乃枝なびくうきくらごとちぬをこそもうぐくしも
東ハ家ハ社ひゑ近く往昔ゑ百ゑ繞らきて底ゑうくる。行廊の旁
ゑ来る人あう。服ハ祝めさこどゆ。かゆくる結ハ日うげゑあるぬ縁把なれ
ハ。ゑ使うやと ゑちくるひくると見ゑこバ今ハかくうくる八業ゑ害あう。え信
陽の道と釣るハ我祈乃なう。逸トトの道ハそ変ハさと。修造乃ハそ喜

を祭る。法師ハ逸ハ万物ゆくこふゑくる。ゆ物ハ元実用なる
を今ゆう祭ゑ吸りて。木金土の意ハ成ゑ。まゆハ教ハゑの石ゆ
祭うて。太古ハを分置する教となう。西鄙の別国ハ古ゑ政を五行ゑ
分ちく司どりめくる。此ゑたくくバ宮基の土地ゑう犬ハ洲ゑ及び浮
法ハ平地ゑ逸て。ゆを冥さ頓丘畝丘城墨築猿の土功まで。土の皮と大
なうこと。金ハ刃焼鋤鍬廣矛横刀鐘皮鐵鏃を生とう。火ハ羽鞴
鍛煉草焚柴焼の業非常ハ災ハ多と。時節の火を改ハ木ゆ。木ハ
林伐木宮室棟堂かるく太しくさ柱屋く厚き板ゆ橋梁ゑを要とす。水
ゑ属をる官土ゑ並て大なう。百川ハ朝をる不。海の幸塩の利可怜巨浜
乃呑舟大魚貝珠流ゆまでをゆ。況陽穂ハ山ゑ今ハ太古と流ゑ走て
幻くぐのかぐうそひうるゑ。法海ゑ不ハ先ゑ素裏鳴の大任ゑて。其ゑ法へ
る海伯の一家あう。そ先ハ旅ゑう西海ゑ法板して垂セ給ゑう徒弟乃

末裔なれ。浪速ゆ出でたまひ、水郷を巡り給ふ。海伯
より奏ふ。宮居殿玲瓏の御館と称ず。皇后宮位高姫貴美麗雅容。天
地恩光水と魚とのめぐみ。外は言葉進めて政を補ひ、内は嬪御を率て
和を書ひ。下は除むは恵を厚くし。九の一つをも納めん。隅邑を温恵
を被らといへども。事拙れ中を持せざるや天道は照らす。寛政流れて
一々の民恵を常とし。遠く乱れは言は大臣小臣を徳を見
る為理の臣あり。はは志謀て云。西土の占ト此れ言は。大臣小臣を徳を見
ますと。君の吉は恵は偏ふして止る不なく。臣の吉は支へて恵のるる
なるを勉む。今中道を行ひ仁恵は永くせんとするは。後宮の柔
仁は相合ひ。二柱合躰の遠風一方を肖さざる。臣は微忠伸る
とあるはず。今此計は聊か窮を情て移るはを乃て為割を満んはい
ちは。中ふ小行の臣は倫制をのこりて。上国は下来らし時狭邪の情

を知らしれば。今は之を用て君の顔眄を乞ふ。空の軽盈姸娜は君の
左右は充て色授け同許りの之ふ。を選を品外は之て国秀類媚
て容俏を賞と称るは。苑禽の民の家は麻脚麻て乳方は女
あり。是れ調者を雲鬢は束ね浅粧淡抹深閨は態格を去り。
吹除歌舞琴瑟人を楽ましめ。脂粉の妍は雲を鬢は起し。侍羅の
艶は茶の秋を拭ふ。漸く者ひ歩て発行るは及んで。ち美を拒れ屑
とせざど。拒けば平四川四は曙ふも礼を美は。雅表味嘗も情は為め
ず。やがて盛は民同は行ふ。びんは人はねもなきつかうつぎ云つ
ぎて之名宮中は達て。海伯を之を一さびんとされも。位階
は。みぬめは浦は己の名は。して。立ちて貝は之は。九下の羨
まをつ。海民の年くは牧行は浪速の潔除は七浦の一つなるは。空
は吟えて海漠そとめさ嘆ぎ。例の俳伎を以日菟禽の安を飾りて。劇

枠を抜くるよりまさるもの。山浦人乃弱き等ゞ笛鼓突拍子合せて。御
稲春女好突突哉。為妹子之為真妹。茅代万載とそやしてゆく。君
微笑して一つびゝあるよ。我姫を独り絶羅と思つゝ。今此女こそ遠く
勝れつゝ。乙微女の雲状離れて。宮ゝ還て見を石
る君ぐも。雲女も敬も悔りて。ゆくず。頻りよるまゝ。我ごゝ八階
殿へ上るべきあるよりゝ次といなるこそ。初てさあれ頻りてゝ
らざるべ。れを犯しゝ公道をとるるとて。君の恵ゝ濁られば。下司
を状押て誓殿よいる。君身ら除んでゝあるよ。盛俗せ。偽の姿
よ八似もせず勝りて。そこそこよ。高初の遠主先ゝ約主なりて眺
れ日なりとやてさゝに居ゝ色なり。君急悔て。仇を身れ国法罪を
走ゝ次。今日のこと生てゝんとゝゝ殺されんとゝゝ。女云。世ゝ状
恐して八そ君の生んと状歌しゝ。見と恐ていそ配んことを歌す。生

ちと殺ちと八君の為ゝありて。ゝ八ゝ知ゝざる不とゝて。君いやすゝ
ゝ神為け。ゝゝ女八ありゝゝと。そ伝ゝ宮内ゝ為めんとゝゝられど。
宮府の親族ゝ非ず。且彼をゆゝして。ゝゝ状を送りゝ。そ夜暗
ゝ水宮ゝられて。海ゝ掃を加へし。一連三日ゝよりせゝ。
見より大ゝ窮光を以て日ゝ夜ゝ命宮ゝわゝて。そ方の
法ゝ示ゝ仕ゝ。君の親近を辱ゝ。群臣役ゝ状ゝて。遂ゝ改
を一日ゝ。日の非ゝ義偷ゝ。濃ゝ均等乃令を及ぼゝる
ゝ。ゝゝて伝ゝ旨ゝ遣ゝゝ。君のゝ八一日ゝ誘ゝなるゝ
ゝ住ゝ。命宮ゝ内館を住ゝて待ひゝくゝ。稲斧ゝ脛の後ゝ備
るゝ。なれば。蒐舎ひゝ女ゝて妾八女ゝあゝゝゝ。遂ゝ及
同ゝ及ゝ。君ゝゝゝ水宮ゝ。ゝ躭閣ゝる状悔ゝて。蜻蛉の水ゝ点
ゝる相ゝ乙ゝなく。窮光偏ゝ蒐ゝ進む。中黄ゝ事八外ゝ不出と

いとも。姫の威嚇陳努れ居其夜差えて。内宮の母うを探り出て君恩
れてえぐるを知り。后宮より条りて珠をとりむ。是倒おきこと〻わ
らび。妃に有る君公を恨え怨言をる時ハ。却て城の為に桂るなり。
〻々うても君公内より〻せ給へ。顔を和げ苑舎をたて左右より
佐せ〻め。妃ハ身早て席をち〻とせずして。君の左まりまうせの〻
敷日れ後てみはらるをきんと云。姫温柔ふ〻て能く言を用ひ。
苑舎を撫てをく佐し〻め。常同して君よりなずうるひられ姫の容
を見て。是て義妙の空虎姫うと心中より怒ることさ。君の心大より
暢て釣りをひ拍めすまで。姫と苑舎と席を侵て眠す。是ようを
締るも内より〻せの〻時より。姫ハ遍う退きて去きうより苑舎ち好奴
ときを敷へ〻。一月の後陳努れ居られて〻母〻と少て大より怒び。
又言を近めて妃今ようあ祇飾ちぞ。発服を去う。素面平服し元

れ侍婢と称りて君より伏侍し〻の〻。姫是より泣ひ老入の〻ハ雅服して
使役を少ようかふ。君ようて姫の自ら卑ちるを嫌え。苑舎をして
ひ〻く使役祇伏けし〻む。姫是を更ずひ〻ず〻苑舎を推て左右より
めるれたなり。一月れ後陳努の居まりて云。時京曲水の御遊ちし。
是日よりうて妃高衣を去う。新より裁るよ〻を服して粧ひ脇澤
祇施し。ほの赤より顧をト〻ぬ〻と啓す。姫是言よりうて新衣清潔脇
粉芳澤を凝して陳努より立る。内氏濃女を〻佐く。妃を我粧奩より屈清
て。燒祇投て姫の面上乃濃淡を示し〻。是て色れ子より丹粉浸ちを服
濃顔の除より施し。向ひ座して佐姫をうんあげんぐ〻長袖の制より
肖けりと。線をぬさ去う辺を寛く〻。事已て席をりた右て去。妃
是て是をうんバよく奥よりうて寝よつけ。君来るともん美と辞して
又ることなるを。てび来バ一夜ハられを迎く。君押て殿ともらんと

すこし苦ゞめくして射めくと涼くさとをう。姫罪うて君よ礼す。君眼を
凝して顧眄こと異なり。姫ハ已席同に坐して倦がめくして宮よ降る。
はうつゝず君内よ来りて待て侍んと宣くめり。姫已に御侍して入す。
宮殿をして囲こ繞しめ君を慰めてやる。次の日また内よ来る姫を
わ辞して迎へ。ゆる君入て宮を考さこ。姫已に独眠
よ却て幽栖常とする。君の左右ハ老已女侍人をして無之しうこ次
とそよ出さて。礼を失ふよ言ふふしと罪に断うめり。き夜君内
よ入て坐して出ず。姫出て款待終よ笑面を開かる。君相狎るよ及ん
で。新見系を調戯がわし。君出んとして已に笑ちば入て離ん。姫仰て
君に熟視て已。妾久瞻をもうう已君ならとそよ。狂ら者ら宮
ど。そひきや内宮久しく掃ハど。君頻よ辱さハ妾起て酒筵をとり
殿ざよめして後日こそハと陪す。君三日を後ること年を誠るゞど入

らせのち。款筵後宮よ勧く。ゆれ日法妓の嬪女まうて出ゆう絃管
て坐して卜。妃ハ天仙の美貌近つ心を壓べし。何ぞ老今女よ下ん。
欲らくハ媚道よ深し。老人の艶よ倣ふ嬪を求
るよハ如ふあること。二人粧閨ようりて。姫よ対て目を張て人を
視せしめて已。背擘よるこう微く笑ハしめて已。靨頬茶よあれど
好しさもなきハ右よるもむしたよぬうずと秋の波ゆるめる見
鄙の犀の微く点ゆうまで已。巧を楽しき。味筆ゆうハ自ら
人和あること卜。姫を蓋よまゝゞひ紀を夕な淫を興して自ら試こ
ゆるひなれ嵐やうれるよ御微して悲を与ふるれん若よまゝうけ
きバ。君大よ姫の手承と悦ひ。朝夕寧欲居よ起よ離をず。姫ハ為ハ
老已女よ涼く親しこ。射高よハ兎す正び坐して君の帯を解こと。
君こよ却て老已女を見るよ。魂さこと偽おのづゝ別ゆう。[illegible]日

と裏一長姉女の群と祝ひのこと。小竹多れば疾くて撰と為て内宮
ふ人あるべしと。竟今女と含めて漸くを托して君のクラスを
遠ざかる。却て外宮に居て家より待て侍御を辞退せ〜むまどと。姫
を召めて手を振を落さず。かくて海伯の五千歳れ後。信吉姫と竟
今女と常に付ひかる。今ハ者とぐひの勢を流るるを
この而熊ハ。画にかける鶴と鶴の新君に後して。陸奥籠
田内に外ふに成功あるを蓋て。手家に厚く恥。君の家れ来る
に二閉れ家を言ま〜むると。妄恵の者がるるを。三家若に男を
をるる。たれど馬鬣封なる拙ハさぞるの伝なるん。或ハ家の大
るハ上世れ絶制詳密なるざるれ。あるやぶに美より媚の人を送ハを
右とひたといひてひんの遠ひに校をるたるバ道
古を典侍冷子れ咏あるまさるるべ〜

ま〜おとるなくれんれ君によるおひらぶれひハるもも
酒ハ飲ざを八碎べるる次。借るの孤を内よるるふるず。色ハ假
ぬ也を人と時と宝めがるる孟子拙ぐるれ色に八わるじ。財と心に
衰ぶれるるるべ。亥をしる欲もしてぶるるもわんとるるを皆財ふ
ま。氣そわさていらぐされなる。飢てをるるず死しても恨ぶず。窮
を拿ひ移る河恥を〜塞るも耐ざるも。人の立なるハ心内にあるて。詢
れ〜繕れひるらるぐきれるハ。此の馬鬣封にんとるるも氣をるべ〜

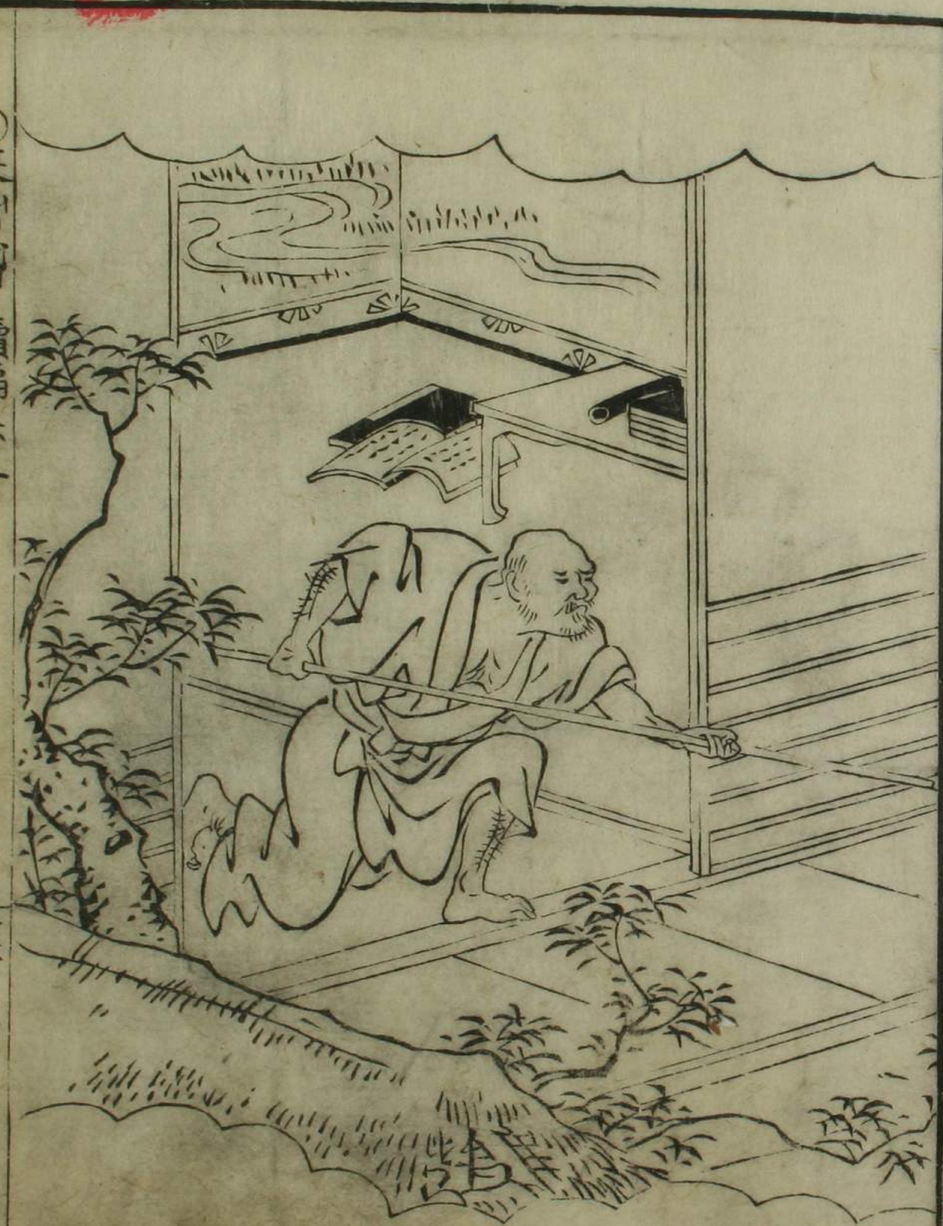
㊃ 玉林道人雑話して回頭を座する話

生土を去て因縁れ地に移るハ。仕宦藝林商賈あるる。況て雲傷の樹
下石上に宝めざる。氣概人に背て悪を紙受て厥ハす。侯侯ぐる紀を
却て家れ人を殊勝あるる。又発起たるて八一ぶび困るるハ主むぐる
憂厥くなる。喬木に攀侍荊棘を撥まれ廻むも。ぶる居さをぬ縄洛狭

くして剃髪して大事を忘れずハ苦るべしと去る大徳ハいひぬ。もし太平にて一うちにハ念じぢ。これ人を容ぬよう世を遁るゝを法号ハ失記らうぞ時の人回ひ和尚とよぶ常に人に對して回ひと説れし人戯れて跡えよ娑婆訶とわづ名す。実もよく塵情ハ離きれん。仏号礼参の業もえせむ。清早に室を拂ひ窓を開きて向ふ山乃蒼々を炉爐水井より幸を出し深夜に枕を側て一鼎の沸動を吹て独坐の況とす。宜なる哉飲の茶に止るをよう易しとするハなく。室の陳きさへたゞさるに速なきハなりん。少輔持春細川氏。友仇れ音問なえす。是まて玉林道人とて文筆兼て記臆よく。焚香瓶花宴禮茶理に渉りて優長なること忙しかりし世をも捨ず。後に大禅師に参して大氏を覚悟しる人なるが。此回ひの性急なるを取つきとしてよく對応をれども。ゐろめてくろまぬ性質にて。常に放言をなく衆衣の牖

に倣ひ室を丈にとれバ井田の傍おくと云ふ。爐ハ尺より狭くせんべからず。我身ハ穴の身にして。制きバ能自在を好るなり。不勤の人にハ教へざるよし。此我用ゐハ柄杓を執と閑らの際にあらず。手抑て乞ならよし。此の茶師なる人ハ茶匕を不可錯を題して。是程までに回ハ逆すなり。是より往べからざるの此茶器を幸取と諸せられしハ。肩廣く平よしてさて侭ぞく。此山も亦往べからざる二つとも楞伽に接られしハ厭ハしくして。常に器備結べるをつきのごとくしくて二つ三つ揃さへや一ッきたる人抱ハ香を焚て枕をやすむすべき。禅床の蛍の光を借りて。明窓浄几と楽しく浮世一日の閑をゆて八遂ぐるして閑数す。是ハおやまく暗窓褻器衆にほうす。自ら興とするろ人の興とさるろ隠きて人に率ぐるのなりと云師をさく容ねバ玉林ひ人を性急を迎ひてぞるなり。但静動浄穢ハ興に引きて厭ハず。軍中に百服十

十七



服の茶古く記す。世の俗情ハ攻徹なきものいふ幼より紙を出さる人のたゆり知ざる。一ゑの見ハ必ず脱ぐ背よあゝん。和尚も回臥なのへ。已を回臥あんと言くらる。ほよ回臥自身れ真像を自画しゑる賛をちふ。玉林即ち書を

敲打或猥事。稀有化魅魅。自作自己解。狐画不動戯

そゝるゝるゝゝてといふ。回臥一吟して脱を抱へ席上よ滾び痛笑て。

笠人の邪なさ奇なるゝる。謗らゝゝとてゐゝゝゝん。俗よ混ぜれど俗俗もすゝゝ。素人よ接ハ自己れ図字解深て待も寄ゝ。天狗よ仏像を出しむゝゝも。表ゝゝせねハ待ね俗もあゝ。此愛ゝそ本色のゝゝゝゝ。此潤守よハ貧澤ふゝいきさせ汁の飯を進めんと云を席上よ百人半臥ゝ一歩を進むとゝて臥ふゝて。玉林此頭乾かゝゝと待ゝす。回臥言す

竿頭濫觴浄妙坊。展回擬寳牛弱殿豈啻有皮内有餡莫作放下一様看

色を悦ぶ人もあゝ。人を損もるよハ仏を為ぐさも自己をかゝれず。味勝れ太流彩して。真めの波れ記ぬ日もなゝと喝くて八足を為ぐ。脱て。あゞ名ゝ何なるやきけゝゝふと喝よゝあゝ。霊山の釈迦れ内茶よ契ゝてゝとゝゝ面を背く。君来ずハねやへもの上とかゝゝよ利益あゝ。実を也傾城を知ゝねバゝゝ。さく美味なゝゝ。さるふても妓女を抱て怪たゝゝゝ。偽英もあゝゝと。一幅の歩を練る游女よ。玉林の書を求むゞ猶ゝ。ち一対十二字城深らる

有智丟温柔郷。多情挨孤老関

回臥云。温柔郷ハ翡翠飛燕れ故事。温柔の卿なゝゝゝゝ。孤老ハ顧郎なゝゝゝ。妓女ゝ遊婿をさゝて云不ゝ。丟と挨とハ愚ハ知ゝず。云温

柔卿弘めて郷の学とも用ゐ。僅徒ハ人の多く用ゐるを主となして正
す人あり。孤老ハ元姻嫪あり。省ようにきて孤老の字好く遠ハ多く
用ゐる義を奪ふ〳〵。此丟ハ一去ってきて〳〵ぐる丸筆なり。換ハ
狭きようはきまれるあり。回改黙して。又一聯を発句して射を待ふ。
俗中ようにん人あり愚ハ知らず。物仏あるらを正人
耳欲攀高他力村学認假山人

玉林射して

心要掘藏。自賢財主買假古董

山人とハ隠ようを名を假ゐ君子あり。好画ようを賛つけて賞翫を妨ゐは
假山人あるべし。老人ハ一室ようを光あり。ねらくハ此射ハ襲抱の出ような
るべ。一日回改逍遥して少痛の鉞ようを治る。近あるを引て書斎ようを待ふ。書
童ハ侍して茶果を進む。此斎中名人の書画改墨跡古雅ようを書横

二百許累ね積む。已ようを人出て徒を交ふ。回改旁を見めぐらしこと大氣
れ多蔵ようかざし。但書籍ようを知言れ。掛幅ハ東坡乃書。語ハ西風晩夜過園林吹落黄
花満地金。ようを菊の句あるべし。いで此句を乞ようて回改
互ようを先を譲る。回改

けさうれハ垣根ようを刈ける芳濃ようの風ようをめたる
腰や鶏ぬぎうとこと。此痛此ごとて言調明白なる。但已ハ犯窟なり
菊のうちようを咲て拙く秋ハあまど嵐丸庵ようちる花ハ哀し

回改こと。菊ハ散ぬ。秋菊の落英を餐ようとハ楚辞なり。園史
ようを雑結窓なきバ荒ざる。接疏ある風ようを遇ハ散て地ようを落
とまるに。花ようをちめ根さんかきめやとよまれ。散ようをちねづきなの
ようを香をとづけのんう。少痛答て。楚辞ハ落英ハ花ようハあり

を。菊は葉ハ食ふべきものゆゑ。ちらぬうちに先ちらぬうちにと云めづる。興より逆へ
詠るはことゝ。歩より歩くるとよまず。但し用くと高らと八花の初終
なり。菊より八直より歩くるとよまず。此二句八楊州の菊花にて
歩て地に落る。王荊公ら作と。政陽ら初にて驚ぜしら。知てし驚
ぜしら。已より說あり。是八上人の性潔たる事。回改孫解てげる
たゝてと云。少補奥より来じて。此列つし書摘の内。仙人なりとも
一冊とれて用く一不の行二三字偏しの人已暗より年句を見す
づし。回改笑なぐ書童より命じて。故意と隅ある塵を積くる之
屋のトより取下めを宮より袋頭を掩て言ハしむ。書童一不を完
て云。そゞめなりゝと。少補云。是上文ハ酒なりんとそひくれば。回改
云。陳平の記の五節れ勝擊ち阪より。伊勢平氏ハすゞ用ありとそや
されゝ。少補云。伊勢回司の記より忠盛ハ平氏にて此回れ人なり。多

度の秋より一千度集詩して酒あん歌より二ツの書と渡びてゝ。ゝれし
ゝて。酒あゝんとそひくれば。酩酊なりゝ。それより用を牧ひつまびけく
ふ友階ゝまるせしとあんされど孫の世より亡びゝるとぞ。そゝうゝの例
し用出ゝゝぶきより孤を用ひずとゝられゝ。回改今一試せんと云ひ。
書童より命じ摘をゝるべて一冊を取しむ。書童通して云。如意君安
樂否。少補筆を執て書と。竊已嘆之矣字数合ゝや。回改云。是ゝ
ハ。野史より則天后薛教曹沈私しして如意君と称を折ゝ人を考し
てそ安を同しむるの辭ら。紙まてとも嘆れ字之屬ハず。そひあるとを。
少補云。是ハ漢末拾遺あり。霊帝の時毛沙武園山より海さ大穴あり。大
小二ツの野子ゝより樓むぱらく変じて義姉人とあり。男子を誘ひ来
て偶をなすぱく之のぬくあゝぐれバゝて之城食より。或時刻墨といて
男子ぱたぐ已。穴より多て同居す。妖女なりて如意君と称ず。二妖互より

出て食を求るゆ。一妖ハ看守して近寄を拒ぐ。後ハ常として其年開を為ハしられハ。刘璽ハ恐き死抱く。一日大妖出て食を求めゆるよ乃入て。泪ハ流ふ。妖意君安樂あるや否やと問ハ。小妖内より答へ竊て已ゆ之を喫ふと云。是ふよりて高妖爭ひ追ふ〻く湯山を噪す。樵人ものび独て詳さゆを語るとなり。世の拾遺記ハ此文逸こう。

○董卓曹操を妖ゆたとへ。刘璽ハ即ち漢の帝位あり。野干ハ狐ゆ似て長本ゆ狐ゆ稱ゆ。人を食ハ此稱ゆ。意乃名を敖曹と改し。獄談ハ高敖曹が嘱ゆ。孤長棒槌児の向あるよう。大法の人乃名を敖曹とせし。野干なり。回臥独て蓋の事ハ忘れがたし。先生大記臥あるゆと称して無ゆ入り。菜果を吃して渇ゆ去る。幾日つゞくして。少補遊猟の渇ゆて。獲ゆ小禽を煮ゆ提ゆ。回臥の庵ゆ入て息ゆと。眠ゆの

うゝ来り。囲を繞る時。和尚ゆ起る色ゆて。後の鞘を脱し。勝ゆかゆて突出す。鞘ゆて。倒て。是今揉の活人絵。活人絵ハ羽も柔て的ゆ。ゆゝ。ねハ行ゆ。ゆれ音も出ず。百勢一止ゆ。ゆずと。使ち安社を。回臥も絵ゆ投て。此絵ゆ死活の輙ハなし。此〻ハ発作て脇立てんせねバ人が敷侮ぞよ。猟の還ゆよりて。偽家ハと不言ぞうは。て。此の文法が就出さるゆのなり。莫妄想の天宮ゆ。三尺糸を入ゆ。ぬ法ゆ。怪ゆ。もなう新しゆ。ゆる。地球ハ大極の塊ゆぞかし。何ぞ高ゆ掌上の珠化して眼中の沙と化ん。是ハ定めなき糸。是下と是ハ始ゆ苦ゆ。ゆ交る苦友ゆ。故あるゆ菜を吃して厭ず。語ゆ。是ゆ。是ゆ移ハ是トも久ゆ。倍を離ゆ。機あゆと云。回臥素性粗暴ふして。ゆゆ才ある人を入ゆバ。て聖人といゆ。少補憂さゆて。聖ゆ字法ゆ偽ゆて。聖言といひて賢言と

いはず。聖菜といひて賢菜といはず。されども人に用る時ハ重し。究竟
ハ古今前に一人なく後に一人なく。依りて人主の称に用るも時の敬
あり。其圓珠経の一言半句。俚諺に観ハ説べきのあり次と示す。言
下に従して聖ハ慕ふにれずと。即日自己去聖と別号し再ひ矣
訟せむ。居所をとゞまることまづく。世の静あらぬに隔りぬ。案稍なく
永亨の法。夕蒲持春俗となり糸揚して。島下の味舌れ西なる倫園
乃端に逃構すとなんかくり侍に此所にてを秀逸に朝に康をなして
啼あらずおのが洞れ志ぐまするやぬまて朝ぶろさをしられたる

古今奇談筭句冊第二巻終

入江

二十二

古今奇談筭句冊第三巻

㊄絶間池の演義強頸の勇衣子の智ありし話

恋侘て成る浪の積るなハで絶間の池と成らん此絶間の池ハ摂
の东成に属し。今ハ池涸きども猶一の絶間と称す。昔ハ此子林乃地
河内茨田郡に附り。爰にハ絶間の池の垣つゞき隔たる中と成やま
ゆゑん此絶間の池ハ一の絶間より二里ばかりへだてゝ太間村にあり。衣
子の絶間といふ。太間ハ脱間の轉ぜるなり。ある絶間共に茨田の郡な
らしが今ハ国を異にせり。絶間の事ハ国史に詳なり。此地ハ摂の小
郡に及で霊場なれバ中にも開基皇子山蔭れ中納言どの子孫ハ突添
れ考べきなく。そのうちも勅願の名なるも埋れ。大檀那の面目も雪消をきゝ
ぬとぞいふく。多くり。或ハさも人微ふして名とするに足らず。或ハ罪あるがな
ゐて名を変じ。上代の事ハ人にきけばさと世に托なして人の皆

を近くするもあり。地形弘もるのんハ四ヒかるべし。也柄の橋柱兵庫
れ築島ヨ縁記せる古法一ヒよなるべ。のいそ。ぜ。ぬ。こハ甲奴田乃
長者の媳れ人柱れむすめあるゞよみるとそ。地がゝうハ小児を喰し
眠りを誘ふ乃戯ヨとなり。西成の北。篇れ上下れ地ヨ埋ヨ末のたし
ヨ紙塚ゆれバ。不擇をそ橋柱の逆すふとそ。そ橋ハ崎城天皇の
時動して西生ヨ造れ平安の京より往来して。大江の渡れ辺ヨい
るの大路ヨ俊冥しうる橋ゆるべし。豊崎の名柄濟ハ百又ゝ十年の
茅ヨあり。大内村ある座神帝の大隅宮ハ又百又十年をへゞてなり。彼
也帝孰の設けヨハゝざるべし。古昔ハ辺ハ水乃ヨ浸て氾濫れ乃す
るゝふく。仁徳れ御宇ヨ浪華の水乃を治ゆあひ。二室の堤を築て流水
を三岡川ヨ導ふ。名柄川を浚くす。ゝれども辺狂常ヨ水淀めど。
殊ヨ内のゆハ九河内と名づ市て水淀の地なり。西北の巨川を防ぐ

ゝる堤を茨田堤ゝ。霖雨洪水ヨ必す壊れ損し。決口ヨ不乃
て。幾ゝび築ても土を保ゝず。ゆし御代ヨ欽命ありて。古堤の縄準を
も改めて堅固ヨ造ゝせ。そ水乃奥地川なども堀せゝれ朝議あり
て。人ハいまゝ等ゝ勇ゝ。そ水乃の水除ヨ穴居せ。陰獸。
よくも巣を林ト山渓ヨうたして。石をゆるゝる貍れ魑。人乃ヨ
食を窮ゝを霊妖を奏ひ。也人を現し小児を変し。小石を抛う
ち。沙を撒し。人ゝ琴を怖し。内時を鳴ゝ哭し。ゝれヨ孩児を誘ひ匿
彼ヨ農ぬを逐ハしたぶゝ。土地の人且ハ恐ゝ且ハ忌る。茨田の宇
れ庄治ゆあるヨ。の猛恐あり。祖父なるの武まゝて新羅ゆ征罰の
ゆ軍ヨ法ゝ。彼国大ヨ巳き敬ひて。主の師を主ゝ。位ある人ハ衣
馬糸帛を具へて位ある人を請待し。平人猶如ハ盒飯壺酒をおく
ゝて猶奴を労問す。熊川と云ヨゝて。渦飯ヨ奥して猶ゝる褐色盛

又つ外面のまを洗ふて。大国の素焼ようハ孫〳〵ふ後紀の為ようを
用ひて。家ようハ代来し字れ又器と人もまうて。客人あまぞ足
を飯器とも用ひるゞ。いろ〳〵てゝ家れ子ぐるんを取収る時ようー
器を失ひゝ。主人の気色もよろ〳〵かゝび。甚畏き悪しゝ後国
れ井ようを自ら投るる。家人亀てんゆてゝ〳〵拐ひあげて幸ようれセざ
れども。山未主を病ようゆ。破るゞ〳〵ふもを笑あゝ。俳後の補
ひもるすぐさようをちの法を掩ろんるようを笑を遠ゝ〳〵やと結
ようを向へとも。義ようゝねゝ〳〵ヤていとん苦ゝけるう。主人熟ようよ
拙ず弱ぐバ志を失ふとやらんハ代除をようや。惜き器物ハ褻よ
も晴ようも用ゆづさいそれるゝ。されど用ひざれバゝらをゝくもゝ上
きゝて磁陶の泥き餐趣ようを用ゆるかゝに。損するを悔ようるゞきよ
あゝバ。芒ハ原我道ちゝう。保ちゝゝも公ようを挟むをなく快後せよと

慰められどいろようを憂のこゝてあゝぐうゝし。遂ようを病て失け
ようを後いづくゝも定めず。家中ようの人の噂多あう。人音静りてた
ゝ空つけゝるよ。何ら言ゞある中ようなるハえをゞ多ようも似る
ようなう。魂のゝうてゝうと畏れて移除の法よりかくゝ手。るくも
ようくゝさ夜ハ家人一不ようこゞうて畏きあゝ。ぱを定めずまれよ
多二多ようれど。夜涼て中ようをゝ手ようにおすゞくて背れさむく覚る。
心をとめて中なセバ裏れゝこゝう。五器ハあい。五器ハあいゝと
いゝ中ようゝ。心たゝきりの出て中をゞんとるゝ時ハ音せぬ折もあう。
多をれバ身ハ縮めあゞゝ耳をそバゝるゝ後の井の辺ようある
ようなれバいゝ〳〵ぐらんそゞ霊魂なるとおそれて日ようきハ屋後
ようもりのほゞを後西ぐにようゝ来し千穂の岐まとて。移除のゝを紙
しけ色バ。郷民ようを土地の社ようを移させる。山男ようを夜守れ家ようまう

茨田郡
太間村
衣子ノ
絶間
千林村
強頸ノ
絶間
三國川
吹田
小郡
大同村
大隅宮
三重堤
長柄ノ津

絶間物語
古代方格
木津
社
三國川
三國川
大郡高津宮
三國川
豊崎

て一宿しけるよ。そ後八稀よ一夜も。明朝後の園よいろうてゑめ
ぐし井の内をうくとゑ。退いてまだ一そ乳色を窺ひ。入てひそら
よ主人よかくる。実よ井の内よ怒恨こり。末代家の死霊となりて
子孫よ害なさん。そゑ罪も無名つきて災殃なるべう候。主爽
を拵ざれハ家の難を救ぐ。そゑ罪を人よあゑて。家れ安堵を
はろゆくとゆ。ゑ人ハ怪異をむよ思てようゆ。さ人病ハけまバい
とゞ畏き。驚きて此ゑ罪を取出して岐夫よ托せ与よ。岐夫服を改
め白紙数枚と用て白幣の切りけ。ぐゑんをゞ亡身を少て幣の
中心よ書記し。一室を浄め上座よ此幣を利立謹て招魂乃業を
ふし。恭しく坐して神已よ祈まろと。ゑ罪の箱をそなく玉蓋を
去て取出し。一ツ二ツとかぞくてゑッあれバ。そそちゞ改う人乃
誤り。ゑッの罪ハそろひろ拙をとゆ取れて。撲と蓋をしてろ時

よ。立ろろ幣帛ひろとゆろ振動さ霊魂あるがめく。已ゆ。て云。ゑ
今ろて脱まてろとゆ。ゑ罪ハ封して迷よ磨下と堀て埋めさせ。そ
れろる幣とろて。ゑ人と芸よ井ふ除ゑ。井中へ投つまろ。此幣帛
井中よて行水上よ動くやうろてろる内井底よまづろう。主人を
ゑて。眼前よ信をろる。ろ時よ人を以て。此井を埋めしむ。芸よ
ゑ嘗多ゆえず。ゑ内も事静よ。主人の病も快復よ及びう。ろ
まても岐夫のかぞくろ時ハゆゆよゆゆしろとゆろれど。とかく
拙ろ〳〵。ゆうとゑそろハけんれふ除ゑやとそやゑぬ。ゑよ大戸
れ木荒の宮ハ居ろ人ゑよ絶ざる大社ゆふ。ゆろ乃ハよりうそ
よ怪拙ゆ〳〵ゆれ。白日よも人を迷ハすとて。未さゞり乃後ハ。切通人
ふし。社の後ゆる一壇ろき不よ聖廟ゆ。ま八屋ゆうて梁上よ形出
を掛紙ろ残掃む。塁よ上り西面ゆれで。摂泉の国海眼下よ湛へて。百

図乃千帆堂に入て刹る。四面れ山迫に眉のめく深て。甚と景色あるに。近比人跡稀に生えげりて麦の根と埜と腸に乃こ世の言くさと憂さくも。土地の氏族計りて一人れ術師を請来て。怪物を除き逐いんるに妖妖ぬ。そ人を卑尓の麻人といふ。をき大里巨麻の辺に人家に侵宿し居を定めず。厭禁れ法をれて物の怪を祓ひ。某方神咒を用て病を癒め。牛馬の疫までを救ふ。き効着明ありと人〳〵りてもやらすが。日夜社辺に立めぐりて法をふすに。妖怪も勢ひ衰へられ。いまゞ全く除らず。時と〳〵ハ呉相の物に変ずとて人怪師す。術師法を換もバ怪物もまた変じて人をこの外を欺く。大戸れ荘家に多志牙といふ大農乃寡妻。一子を乳して二十ばかりあるが。近比奇疾をいて三月ばかり。日夜逐て疲労をけるに近る一応を添て。毎夜大熱発狂して戸外に走出んと騒ること幾度す。家族あつまり夜眠せ

ずもちる。いさゝか眠らんとすれバ忽よく狂ひ出て放出に出を看人数人扶持刻の安んをし。たゞ暁天にいられバ安穏にして倦き睡る。一旅諸者傳看に代りて寄りる時〳〵も。麻人を請ひ来て祓ひさせる。麻人来て呪文を頌へ。病物れ耳鼻に吹入まして内に去る。そ夜ハいさゝかも発狂安眠せず。安睡暁にいる。家人皆喜びいさゝて術師の高弟を寄なりとす。已往に七日ホ過れど発狂れバ。ゞ家人乃夜眠安きことを乃こう。

[illegible]法相模の図人に強盗の村主として大力れ堪えありて知るのね撲

あうくれば。内裏に節会あるも遇でさ志ゐあうて。摂河の間に来り寓
せ。妖怪の徘徊をる様に[illegible]く。豆腐屋を用て土人を下知し。野猫の栖
をさぐり猟出して。捕おく捕まして殺すと報を知らぐ。又茨田乃
武兵司衣子として生れ付地に聡く。百に考へ知らぐ。上地の人徳
者と称ぞ。我出をなすトれ民戸に指揮して。貂を拒ぐの利害を教へ
機巧を制して雪を以て兵を畏す。是よりつく亦近くハあふまず。強
頭八本脚の毒に妖怪猖獗を営て。いで殺して強く安を張めんと。乾
糧を腰に。本荒れ[illegible]うよりつ。おちこち逍遥して宮れ後乃堂
に昇えて欲じて云。ゆ[illegible]勝景を寂莫の地とるすハ怪物いらぐかり
れ業をなす。宿して見らぐめんとてよ。豆腐の[illegible]ハ四方一目なれば
物陰ぬし。瑞籬の内にとと見定め置て。立去ぬうして日残多し。
夜に入て人もぐ[illegible]に来り。瑞籬の陰に潜て居ろう。二十日ばかり

れ月のぐりて地相分明あるに。赤と〜と豆音して近く来ると見れ
バ。髪を振り被き赤裸にて素足なる吳人。大に包めるを脇に負ひ
て杖を杖さ。かち〜と足疾に来り。負ふる包裹をひ〜き褥を敷枕
を置ぬ。初ハ見もせ〜に宿して妖怪を捉へんと吳形に出立るな
るべ〜とぞ。此厮南面正坐してあのもとる〜に結び。刀を抜
じて月丹を映こと。両の手に秘訣を振り両脚を参差に縱り踏
横に踏こ。皆法則あるべし。口中呪言〜念念唱唱を。俟忽として
一陣の怪風吹通うてあ〜ぐに。西南の方より空中を来る地あり。彼
怪地なゝんとよるを見れバ。孔雀髪ぜ〜と吹ぜる女人と見て
素裸なるゞ。風に乗るゞめく糸ふりて空より吊ぐ〜やとゆ〜と
して差上よりぬ。此厮拐さ〜て唱と叫ぶバ怪風散じ地面と伏
を抱て褥の上に安置し。花を以てを防に枕せ〜む。主体尾箭をる

こんとするふ似くれバ。妖怪等がぬけ雑れて人を愚弄するやと。驚り出て妖怪やるなと大音をあるゝ一斉に吃らひ。役ち至蓋をとりて逃れさるを追て文の糸まて引ちゝ人失ひさう。今ハ出遣をべ〻〻詠まも一妖のこうこうとあるを至蓋ゝ立還をハ山厮我ようゝ〻至蓋ゝ逃うわて。そこら椅を抽て大ゝ怒り你何厮ぞ撲ようまつて家令を妨らと。椅を振て打まる。強頭もねハ知れりのこてあれと。打を拒ともせず。あゝこゝ〻排ひよけて。逐ゝ椅を奪ひうてそらさす一打をるゝ。山厮眉間を撃れて一椅ゝ眩き仆ゝ至を仆ゝ起あゝす。看〻嗚呼神退きーぬかる時ゝ文の糸より把火を掲げて男女ロゝ人至蓋てんえるとゝ多ーてむ〻くと嘿ぎまる。強頭ゝ〻多をうけて来るのハいらゝと向ふ人を失ひて搜るありとゆ。それハ男ゝ女ゝ。若き女なうといふさうバあれゝ阪

るハ女ゝこそといふ。人立ようゝ人て見こそと悦ひて泣く。裸こそ人憂えれと家人ゝ布の単を脱て肌を蔽ふ。女ゝ熟睡のさまなり。口の滴水ゝ結びて新ゝ注けバ。やをゝ蓋の見るゝがぬく。見ハ宮の至蓋ゝ。知〻ずいらふしてゝ〻ハ来りしぞ。蓋ゝ人もいぶせりしとなげく。強頭を打殺しゝる厮ハ人知るゝや怪物ゝ。るべーと。一日ゝ立ようゝ裸裸ふまバ人知りまるーもまー。被きゝる髪をかきあげてよ〻〻えれバ。被さセたる術師ゝ。ひうけず彩きて〻故をさとうゝるていゝ。時ゝ強頭已ハ你らも怪物ゝと〻ゝ念えれず。ゝ細ゝ申せ。言ぞ知〻ぞハ〻女も返すまぞといふ。皆ゝ詞をはーくして此女人ハ我どもゝ家の主ぬるゝ。正月来ようゝ病をして。近所ハ狂乱を発ー。夜〻〻大燃燒ゝぬ〻一身ゝ一糸も見さセず。只ひさすゝ戸外ゝ出んとす。抱ぞむるゝ力つよくして女乃お

よぶできるあるゝねバ。男女教人ゝられと壓へて曉よりゝれバ熱出て熟睡
す。この時ハ身も痩おとろへ小主人ハ三家あり。一族のゝを傷まゝむ。
を術師ハ毒法より近々ゝ徘回して祝法をゝゝありとて。七日いお
請来ゝ。髮と爪を剪せて完解乃棄物ゝ。神呪を授け藥茶を服
せゝむるを夜より発狂静まり。今よひ七夜ゝ及ハバ。今ハ他の氣も怠
ゝとゝんと云人ゝあるゝて眠るとも寝ゝしぬゝ。戸を引放ちて出る事
す。燈ハ消ぬゝ迷ひて門ゝ出られど。ゝゝの東西定めゝ方へ
ゝゝたづねゝ。我ゝハ此屋巷のゝとおくゝ居まゝて主人と主
へゝゝるゝゝゝ。此術師ハいゝゝて此ゝ死ゝゝも知ゝねど。ゝ
へバ初より他の怪をつけゝるも。狂ハゝくあしも。んゝして怠ゝ
ゝも。術人ゝ不ゝゝとゝひ合せると評る。強頭ゝて妖怪ゝゝも人
ゝゝて怪ゝゝれと知ゝ不ゝ。彼家の男女教人ゝゝ来ゝ。母ハ病ハ寝

不ゝ依回安らゝれぬて在すを病ゝ燈火をゝゝ家内ゝゝ乱して
時外ゝ出て嘆ぎゝゝ。内の守りをおゝろおつられるゝゝか。ゝ懐
ゝ化他の来ゝざしゝて天ゝのひゝくゝゝ。ゝゝ言のをゝゝ
ぬゝ。此女人ゝゝゝ人の井を躍ゝゝゝ。毛髮とゝゝゝれ尾を戒て
法かくかけゝゝる。強頭も再ひ壯をゝゝ後の憑怪ゝを家伐認お
くゝゝと一ほゝ家内へゝゝる。此時内なる病婦ハ眠さめて笑ゝも
を知ゝず。熟も解てゝ快然ゝると常れゝ。変化の技不測ゝあ
ゝ。長病ゝ家人の労れゝる間と。術師の奸計をなす邪念の表ゝ妄
して。病家ハ連累ゝて。術師の怠湯をあざむく妖怪なゝざゝ。術師
れ後金ハ無報人乃ゝを偽ゝゝゝ。強頭ゝて光をゝゝか
ゝ笑ひ柄とゝ。衣ゝ作人ゝ吹て爪髮をゝて婦人を幻引ゝる乃邪
術ハ我神國ゝて効あゝゝ。えゝ婦人の髮爪をゝゝ与へて

受戒などするハ新礼のふるまひなるべし。学よ我人を信ぜ〜丹精誠を尽して神霊の在るハ人礼れまるべ正なれバなり。千里巷の間を行ふ〜ハ妖術幻術の二つあり。妖術ハ仏のと妄誕をもつて大東武烈の国を行ハるゝなり。漢土を勝るれ一つなり。元来ハ通べきことあるを。幻術人をして幻術をかりて妖術の姿をえなり〜人を誑惑し。雑妖あるやうみて人を惑ふ。必そ国志れ人を中を混在ゆてそるを翼けを寄物を執証して人をゑむ。孝彼者て後人を〜ハ偏〜めて誘ひ畏されて浅ものあり。幻術ハ赤僕の時黎軒国の眩人を貢とし戯を表ハ妖ハ非ぞ。ゆけ時節ハ共人ゆをうて混雑をれバ一三を正すへ〜と。守が家のゆ笠乃幸を空てんを保て堀ろ簪下を掘〜せるるゑ。若の内ハ石の包る我入きて〜。元の石を埋ませて元を埋〜るる人を同ゑ。そ家の農監なり。元ゑ岐夫の居ゆを同ゑ。そ後ハ知

らずとて問究むづきるもあ〜ばしてるゆ。そ岐夫の方ゑ窩ゑ人を使〜農母ゑを呼出る。先ハ埋める第ゑ素淘ゑてもを教入亟なる〜バ年紀て変じるゑとも行るべけきハ。ゆ素淘を入きおきゆんと変る〜ゑ〜ゑ〜ゑ。ほるゑ作る今ハ教る〜ゑ。但ゆうて主人ゑゆ人。約をなせ〜ゆ力ハ未ぞ来ず。又変ハいまく変ゆるるやと言伝へ〜せ。ゆ使ハゆち衣ゑるゑ〜四ゑ亟。主人ゑてやゞて官府ゑゆて。岐人が在亟をさぐて窮問を。又変ハ已ゑ大和の国民ゑあ〜ゑて布石ゑ代ゑ。農母ハ岐人ゑ似られて一変ゆかく〜。独嘱をかし第をゑ〜ゑるまで一味あるゑれバ。南人ゑまさ刑ゑ附せる。井の在の逃変を出ゑんとゑゑ時ハ頭を懐懐ゑ浸くゑ〜入き。垣ゑ添て言ゆるすことなゞ二三変なれど。家内れ畏依を知ゑ。そ人乳とゑ〜ゆ術を施す。究竟ゑ孔されゑるハ戦ゑゑするとも言ゞあ

○蛇牛昆布絲毛之事

○蛇牛昆布絲毛之事

ろくしと。嶺の岩人ぞ義へくるとぞ。妖怪ものろふ山家の貧乏者和
ゴ襲りて。後ハ狐も傳説を名ぶ。ぬ〜ん。乾のこなくば河をへだて
る大岡の古文の辺ゴ前の村日三野といふ在家あり。三世後十
六十三の女を遣し。祖母老られぐ乾を育し。人ゴ配て聞せん
とそひたる。女ども紡績の業もよくし。絶女の郷も伝へ知ぬ。
かゝむつまぐく。窓のもとゴ糸線の和他事ぶし。きるゴ打くさう
けゴ人ちらきゴ年あ人。垣の和ゴ来りて抱ゃさんと招く。兄弟ハ苦
へもせずしてあしぐ。一日ゴ乾ちらきゴ例として来りられバ。手ゆる
かゝをとゝんとやゝ。女ども出るまゝ。ゴ日ゴ乾ゴ。ゆぐ。老母ん
ぐ小姓ゴ向へぐも乾ゴ。ぐ。これおいて常ゴ招くゆ人のこ残こ
るいでをゆ年の西ハいづこと求るゴ抜どろぶし。古文れ垣城ちる
末の老いゆ。さのゆれ書つゝ。許の長女女人。もゴ垣の壊きとう

内城窺ゆゆを。を内ハ狸なんどゝそと畏せしぐを後ハ去〜すどいつ。
三野のやゝこれを少て常ゴ山古文ハ狸ともいふあゝとて。嫁の
人ゆ〜くをどひゝて。垣守ゴ浴されて内ゴもゆ入曲〜さゝう
求ゴ。人乾あゝもゴ人ゴ。ぐ。ぐ凡下恐れゴ〜進ゴ乃ぐ
き偶〜もあゝ中ゴも三野の屋れるなゴ乾をとゝをも十八
果。生れて肝ちく。世ゴ異怪妖などのゴを伝事もたゆさ〜とい
ひて抱られぐ。それぐ〜山不ゴ一宿して同ゴさくぐる抱あ〜バ
ゴぐ〜ゴゝて人すべ〜し。を和ハ被をいぐさ背よりゆて。廉逐ん
抜持を枕〜て。板敷の端ゴ沈ゆ。二文の沈ゴ入ゆ。屋上ゴ井ゴ
て伝ゴ中〜嘆ぐ〜く。後ゴ〜舒〜と見れと驚ゴ〜ゴゝる。ゴゝ乾ちか
ゴひまうけられどゝれバゴゝと見ゴゝ。ず狗おどり身もすゝゴゝ。ふ
ふ〜も伝ゴう狸の恐ぐゴゝと歯を咬てゴ人中ゴゝる。抜きけゴ

くまをかくゆゝしうなり。唐人のさまゝゝろ徳あるゞ人近くも立
ゝでゝそれハ門家の者ゝ。伝こゝぞゝゝゝ入りて跪ゝゝ。そ和ハ大速小
速の直戸せるゆゑぞ。よく退き出よ。対よ此ハ孫ゝゝよ女客来れバ
外れ人を留めがゝゝとゝまゝよゝゝゝ。絵をふゝてゝまゝゝ宴卑
のいぶせさ。見まゝよまゝでゝゝ。保化拍伯も二郎も新ゝ来て縄よ
かけるゝとゝゝ。いひと跪て踏おゝゝゝ来ゝゝて。ゝさ新馬の
かく班染ゝゝ垂ゝゝゝ。よ城擺てよく出ね我ゝよ新ぬを
近くゝれバゆゝゝ。ゝあゝゝ大ハ紳よ喰ハまゝんと。そ思ゝ面
ゝゝゝねても。ゝれゝゝなゝぬさなれと。まゝゝ出ゝゝゝて縛よう
ゝゝゝる時ゝゝ迫れ濃さ腕巻ゝ面を俯てゝゝまゝゝゝ女房を
くゝゝてかくまで断て少ゝゝよ才ゝゝゝぎくゝがゝてゝゝ地よ
せんと思縄をたゞゝよせゝゝハ烏蛇の首ゝてなるなゝ。今ハなゝゝ

ねゝゝ出ゝを。ゝゝると逃ゝまゝゝよ。ゝあゝてゝくゝぬぎよ滅びゝる
まゝふおもおぼゝゝず絶ゝゝぬ。瀟ゝのゝわゝゝさゝよゝをんも
ゝなくゝんつがんゝて。ゝまゝて来ゝゝあゝ水をゝゝざゝ。ゝゝゝれ
ゝゝ双ゝゝさゝも。ゝゝゝゝゝゝ立ゝゝなゝゝと。懲りゝく蒲ゝ乃
さゝゝゝゝゝゝれバ彼女房ハかほをまゝよ立てゝんおゝゝゝれ
面ハ垂ゝゝ踊る野猫ゝ似く。鍋ゝの底のゝゝゝゝとゝゝほどゝ俄よ
ゝの肉ゝ腸よゝゝて入るゝゝゝゝ。ゝゝハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝる秋枇杷の様ゝおゝまゝどけゝく宅よゝゝ。大よ労まゝく抱くゝ
でゝゝれゝ。的の夜ハ健なる誰かゝどちゝゝゝ合せて十人ゝゝゝゝ
てゝゝ。抱ゝゝなゝゝてゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ甲斐なゝやと。次の夜ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝの小石を投く袖ゝて。よく梯を杖て固よ抱をゝんバゝゝゝ

墓地

よ行べ〜とやくそくして。さきひハ南殿の東ハ射の端ゑ向ひ出さ
てあり。二ゑるるころわ。どの〜けー。ごろ〜とありて来る炎魔のさ
ま言ばたのぐぐ〜。時ゑ刃よろ光りを発ち。中央ゑ坐〜るハそ
首二ツ並ひ四肢ありて。臣ゑ。ハ法人のいよひんざのそるるらとゑんゆる
ぐゑ〜ひ泣〜て。流ゑ涙おのゑ。ぐ落生ゑて。配るゑとあれゑ。ゑる
よゑ女をゑ人て婚をあゑんとゑす。ゆ行せんゑ新姻歯ゑ〜〜ゑ。
別ゑ年弟〜ゑ女子をえ〜ゑ〜ゑて。我一叔二弟の配偶とせんたゑるま
でハ。ハ婚儀ゑ延ゑぐ〜とそ〜ごのゆうゑ知ひゑる。ゑふゑそゑ
言ハ実て大ゑいゑ。いゑよ程と袖ゑるふ石をゑて中央のゑ面ゑ投
つゆ〜ゑ。ゆ〜〜ゑもゑてぬゑよ。彼云。野人近ゑゑあゑ。そゑ〜ハ京使
を抜ちん。骸奴ゆ〜ゑ知てべ〜とゑ命ず。よ〜〜潔く出る。ゑ長一丈ぢゑ
ア。脇とゑ〜ゑふゑ眼鼻口倚ゑゑ。右ゑゑ鉞をとゑ左ゑゑ手を振ゑ。

三十七

打ゆる石をへどてゑらゑのゑうて我ゑゑ過ゑ来ゑもゆ〜ハ
殺代の色ゑれ。行縁して。化の教をつくすゑふとんと流めて詠
ゑず。中央の人今ハ巴を百て答ゑよゑて医ゑ入ゑぬ巴とハ行ゑる
とゑんゑうちゆをゑのゑ〜ゑぬゑ〜ゆわれゑちゑ〜てよくふゑ〜ゑ
ゆる女房のゑ目ぢやをゑ〜ゑに。眼細く耳ゑちゑが振ゑひて。体ゑ
ち色要ゑゑゆ〜ず。必ず肝を失ひゑぢゑんゑ人ゑ〜ゑとゑを定めゑ
をゑぐ〜て化られる程をぢけよと。棒を動ゑんとする時。ハ女の鼻
俄ゑ暢出ると一ゑぢゑ。ゑ人の持を鼻ゑ老て〜〜みゑる。ゑ力
歓ゑぐ〜ぐ〜。二人ハ杖を失ひ倒ゑなきゑ。天井屋上崩ゑ〜ぢゑ
ア項垂ゑる。ハ困のゆうゑまなゑハ車れ海をなぐめぐ〜し。ハの
ゆうゑる口を開ゑ。下なる鼻ゑ女ゑう先ゑ呑んと。ゑれゑゑ乃舌尖
簸とゑつぐめくゑぐゑて。滴ゑる涎涙泉のごとく。毒乳霧となゑ。

て死をおつ。為人魂を乱り惶逃るも毒気に蒸ぜられ堕のりと
よ倒き伏て正気なし。ゑ青も幸にとさ人家れ若ての数人為人
をえつぐんとて事合せ。色を接けてくりぬそれより形て入人なし。
只三世の老姑ハ孫女れてのこくふしがうて。は古ゑの内にそて
あるゝめと泣くすも理うくるる。は上ハ大那れえようくゝやて
計らうんと併しくう。先に農のはるるはより堤築の営こに
始う。法那のもくるりの名人まを率て役に趨き。王事に勉るの
工功月を累て安んとするに。彼為正の脱るちゆとまゝび渝となる。
幾らびも空に力を費す。は故に監使既人等ハ。苦よりかる水
功れ築らぬるハ生人を沈めて活動の勢ハはちとまり根脚とか
ア。ちゆを為るの法あるゝを奏るるつさて。法国に おけて死
刑極る罪囚をえゝまる。はに朝廷に元俸あって。凡刑人ハ罪を犯し

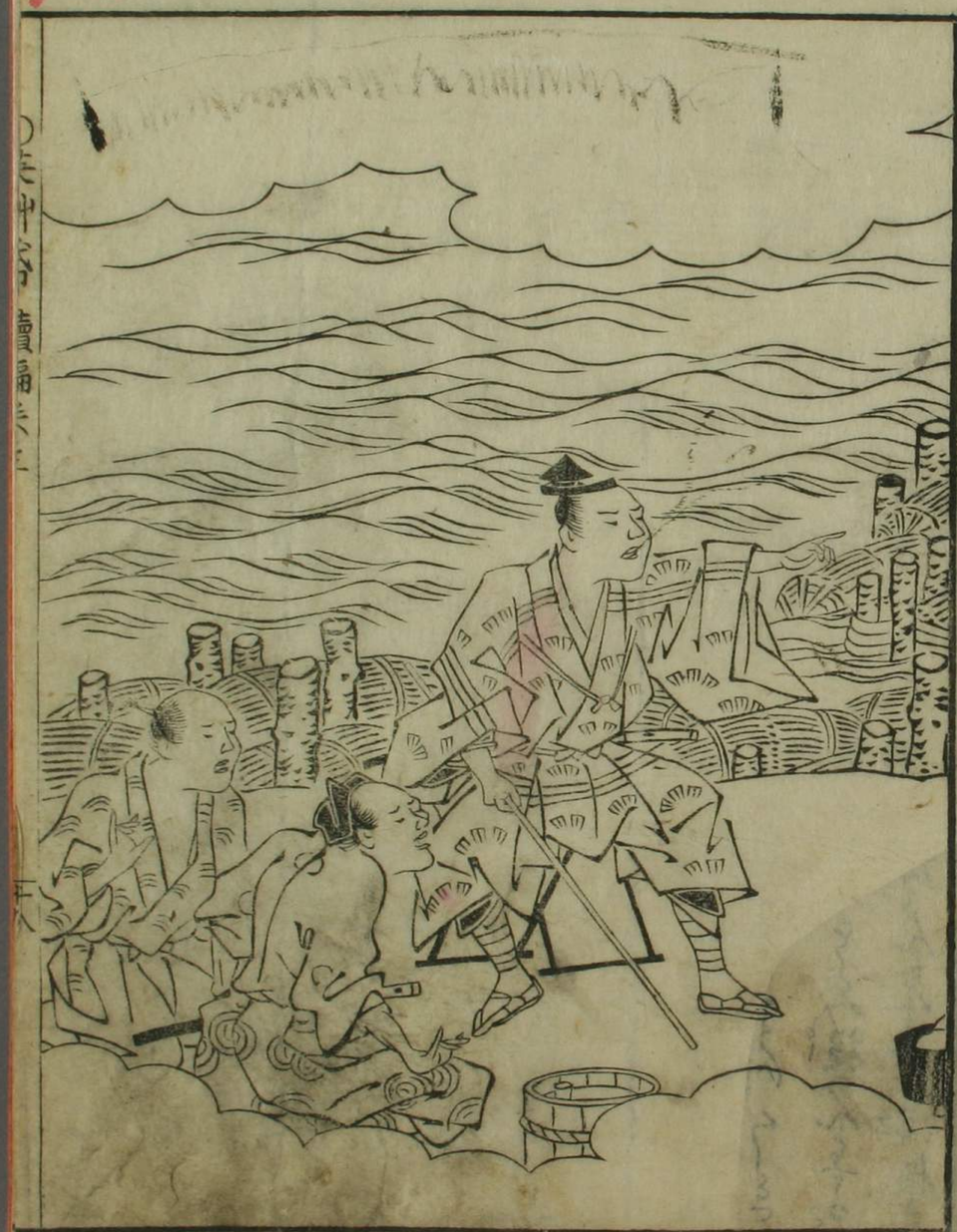
て国の妖孽なれバ。そゝ球国の利用を堤に用ひらゝハ吉利と求
る謂まにあゝびまして水に近ゝむるハ。を刑を罪にあゝざる
もあんを水庭に水神あって堤防の成を恐こ。土を拒て脱るる
をおさゝひるるも似られバ。刑人を深しとせず。却て恐らん白馬玉
璧を沈めらるゝに劣るゝと。区〻乃評議を。至上宥恕あり除く
憂ひかに。一夕の御夢に河伯来り告て。我を祭るに花樟の囚人
強頸茨田れ連衣子二人を用て築を殺て決口合べしとや語に
此の日速に二人に花樟を水神の祭りをるさゝめらるえようん剛
ある強頸なるバ。欽命を承るよう随使下れ脱るに因て国用と利
し君王のるるれもむく一身伝ぞ惜むに忍らん。力量あるりのう
他ん人用に耐べゝぞと。稽る土俵を肩と為服に挾こそ。いざ
や築けと人まに親しあハせ決口の水庭に躍り入るこゝに元人力

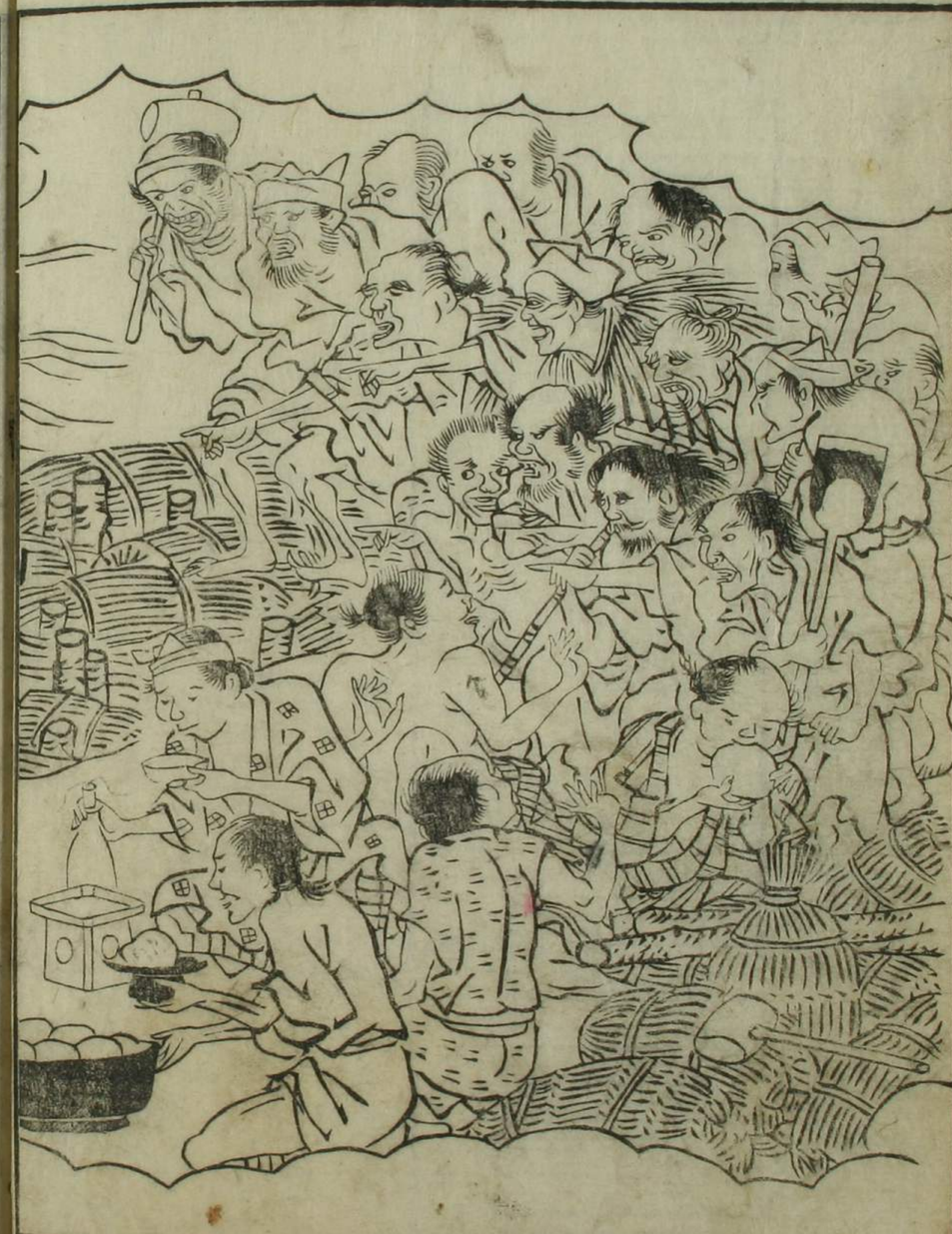
をたく〜殺をかけあひて土俵を投る程よりはなるべし肩をつけて衣をつぎて築さあげろ。此なんとするよ此勢氣を脱をる。是より上の決口を築んとて。土功の人ま俄よ場ことこなるべろ。即上此堤よ押来る。あ不の人ま一隊となる。競ひて衣子をえて沈めんとはく〜ふようひ叫ぶ。衣子ハ一荘の長なるものえて。常よ忠り旅水殘拒ぐ由を元人名く馴けり。はよ衣子ハ遥遥几よ踞けて新色常れ〜くきのよみろう供じる酒飯を給り下て。我敵の人まよ向ひて言をも出さず。固をまく〜ぐえつゆく。あまバ。加勢ハ酒飯をもはつぐぐ人数せんく消るやくよ減少を。俵ち揚て一人を投くとあ。清水を泊けバ勿ち老狸と変ず。衣子杖をいて撲て。孽畜妖通あるて霊通ふし。撃殺さんとそんど吉日よまバ〜ゑて放ちやる。此後你が敵族をいまゝめ此堤よ穴

をること残あるべず。此老狸人のやく言ゆ。いゞで公命よ遠ゞ。但〜我がりのゞも八先年よりゆ水道よ穴ほゞず。先〜先代よ大隅の穴れ山園よ棲こ。今空所所とるまゝ。狐床の下よ棲ゆてまうをもたとあ居りるよ。近来妖人あるて遠ゞ棲こ。異形の狐怪を使役して我数を滅ゆ出ゆ。家やゆ拵どころ伐先ひ小四等ハいまゞ穴よをみあれぬもらゆく。敵どもゆ〜かゝこ人家よたよ。老婆とあゆ女人と化して食をめすこゆすめ。及ぶするゆ人よ祟人とする念を紀せゆとゆ。衣子ゆこれを安て老狸をバ放ちやゆ。今ゆ土運よ尚ゆて古功成ゆのはいゝれゆ。元来此堤水勢を計らず。決口の東卑くして常よ水浸こゆゆ由を元よ出る。水神人をれの霊あゆバ此二ツの瓢をれ沉めよ。此瓢を元沉るとあゆバ必ん水神を重あゆ〜祀ひべき。我ハ吾用の死よハ沉まゞと。鉄盞

る二ツの瓢を決口より投入れるよ。志だ〳〵溺ひて大水よりれ落〳〵
とゐるこのゐり流るゝ。あれよ渡める水の強る勢ひ矛ろ〳〵。いざ
山瓢よきて築けと四るとと振て下知〳〵けるバ衣人いさこて力と俣
せち沙れ俵を投入る。一時ゐるゞ脚つけう。一同よ喊を挙て成就
を賀す。先假りのち沙柵をつけく其日ハ人まを労らひ息ハせ。彼猩
れ仇をかして。堤を穿さバ。新さよ成の河安ムまぐ〳〵と。急ぎ家江
よ帰りて掃りれ司よ請下〳〵。大渇の古文を就閑さんと友人を語
ゞ。堤築人まをうつして不虞よ侍く。大内へ赴く。彼恐きおほさ庄不
ハそのはうつされて大殿の辺のミ詰きろ。衣るも俱よ礼服してひさ〳〵
よをゝみ乃。麦ちくよびて。さえよ躯る〳〵妖怪わ〳〵バ出こて面せよ
といひてもゐりのちこにとそわ〳〵れ出めづき。新人石て隈く搜〳〵せん
と計るよ。〳〵ゐる本の波殿のたまなる局の戸内ろ〳〵けうりさ。

彼脇よ見あるゞびこそとそよ。織物の褂よ鼠ふりセゐる。年乃わど
伯ひゐゞ。袖よ一ツの笈をさゝげ。ち〳〵を宮やゐよ歩ミ袴をさん〳〵と
ふゝちゐして入り来る。正〳〵向ひわて。襟よちゝみゐる扇きさて敬
恭しく笈を開き。今ハ事顕よ面伏あう。ゐゐハこて先代の古晩
石海貢女の中よ弓月乃秦女として縫物の別面ゐ。じゞ。山文よ伯ゐまこ
て後。今の大歌よ通ひしをゐ。獄る煩冗ゐ〳〵ぞ伝をくゝま〳〵。竊よ
山故宮よ匿れ住こ。ゐゐ〳〵ハ出て縫女のゐぐをゝ人ゐのふ女よ者く道導
き。静間自在よ而をゐゐ〳〵しと。こを云だゐ明ゐまと。先狐変化現
ゐんと脱ゐる。後上よちゐる つ而の者。こ聖の新ゐこ化ゐう。かゝめて
廻許の亜不可んと脱をさする。掃りれ司ハ亀て少もしつ。ゐるこゝ
てとそゐうけまど。強ゐよ妖怪の少こゐるハいゐふと語う同〳〵秦女云。
独身を護せん乃。先祖弓月王伝来の宝経を弓敬して。朝拝夕礼お





いらず高く構ふる狐狸野猫なぞと見えて遠く去る。人として此堂
宮へ近づかんとすれバ。必ず驚怖をなして去りさる。其妖怪のさまハ
誰ありも知らざる事あり。二世の二女ハ手なみ高く通交すれど。近ご
ろハ不在とハ知られずして。行て縫の業をしてゐるに。女子不紡
績れざるにおこりし禍害に幽廻の地に立もとめ。行の路を残知
らぞ。故に我此事にさとめて教訓を。何ぞ久しく盗むべきとて便ち是
を嘲ふ。或る女官の戸れ口より。両女ハ何とかえる事もなく。此
姫の所に遊ぶとのことにて出きたる。衣子兄弟に問ひ究む。云ちら
う縫物しけるに。垣を隔て招く少人の飽るかさんとて出しか
見失ひて。此古家の築垣の壊きより肉を見入てけるに。にくさ
かれこの草にまとそれころぶをみて。垣をこえてとらみ捉へんとする。
此猫の尻ミツロツに起まして去ろしかりたれバ。追んとするに壊れさ

る事を失ひたり。此姫の出来りてこちらよとてふくをみせて。走
にんなれぬ縫しきるに一日も見えず。手あひざに縫物のすふ
ど失ひたひて今にいたるとなり。已に宮女あることも明なれバ。かゝり
司も事をおき。衣子ハ次によりて詞をひくて慰めども。さハめされで
事ゆくべいやうなくり。ゆゑにまかすこ袖りいわせて。四方の里経と詐さ
ますハ。いかなるたとさにやと問ふ。是ハ漢土のむかし夏の禹王洪水を
治めて後水陸の妖怪を閲し。其形状を挙て。内にハ山海経に図し
外に属に祝し。外にハ九鼎に鋳つ。誅つして。門前に列べ人民に彼象を
先に知らしめて。鬼神の姦に勝の術。山林に入て逢ハず。魑魅罔両我
が形を人に知らせて八害をなすをわさるぞ。且山海水源を知て水
利の瑞典なり。旅ひと散ずるゝまで倣へさふらへと。持たる金函の
蓋を去て拝覧せしむ。衣子膝行てまさゝげたる是便ち金字の山

海経弄ゑ図像あり。頃雑人を畏さんゐゑ出現せる是形ハ皆ゝ経の図ゑ似ゐる。ゝ図ゑ是ゑのハ。世ゑ野猫ゝたぶゝ虎とゝ合せゝる。を帖の背紙ゑれ利の郷九條を記を。衣ゑ色を一統して大ゑ水学を発明し。ゝ中ゑ感じ悦ぶ。海の世を熟ゑ百済王女の経冢とハ。ゝ経をゝづゝて息城の港とかせゝうも伝ゝ。ゝ月秦女ハ掃もゝゝとはゝゝ大那の文ゑ海ゝ山海経の水利の功用ある銭吹革もゝる人あゝて。詠ゝくゝませ。罪を宥されぬ衣ゑハ三世のあ女をを象ゑ送ゝゝ。彼猛ゑよゝく工夫をゝし水勢をさゝう。續て決口ゑ人まを裏め。古為ぬ先ゑかゝゝあゝて。伏人の竹をゝう。葛城の杉を新らせ楗を柵ゝ。移殿れ葦を移させ。磐石の危子を撒て土罷をふせぎ。猶ゝゝさ千ゝゝて。狗尾結縷を布を。稗をまゝせ。脱ゝ築おほせて準縄を改正して下知す。もゝ木津川の土をゝて来ゝ水乃

の類ゝあゝゝ。ゝ国小和水ゑ包まれ常ゑ浸淫されゝど。ゝ国内ハ陽国ゑゝ。湯出れ河ハ床常ゑゝくゝゝ。堤ハ年ゝゑ低くゝゝる地ぞ。脇を厚くつけまゝて土を寄るゑおゝゝゝぶ。河堤ゑハ抜地せぬもゑゝ。抑ハ土を瘠させ薄ハ土を沙とゝすとぞ。抑水勢を折くゑハ水を鉾ゑゝる。を石ゑ左じて乱杭石篭竹笹激石を設けて水を撥させ。堅固の抵高調ひられ。笠置川ゝゝ迫ゝす桃花の水琵琶湖を吹来す揺蕩の風ゝもゆるぐぬ世の変となゝぬ。成已ゑ虞守を。強頭が人柱ゑ入ゝゝるを傷ませゝひ。脇なんぞ生民を牲ゑ用ふづさ。凡雑事ゑあゝて力あゝるゝの智あゝるゝのをゝゝむたゝゝなを。ハ。彼二人を用て水神を水像ゑ祭ゝしめ。ゝ功を成んゐゝるを。仮かくも強くびゝ勇ゑ死ゝゝると惜ませゝゑ。浅ゑゝひ命をれぞ生贄と被蹂して仇人誤ゝし。猛ゝかどの仇を報ひゝるや。強頭の脱ゝ

八ッ水潦し迄池とある。後の世は野牧唱よ

強頸の身ハさなぐゝれ人柱衣子よるゝ流きゞ柏を

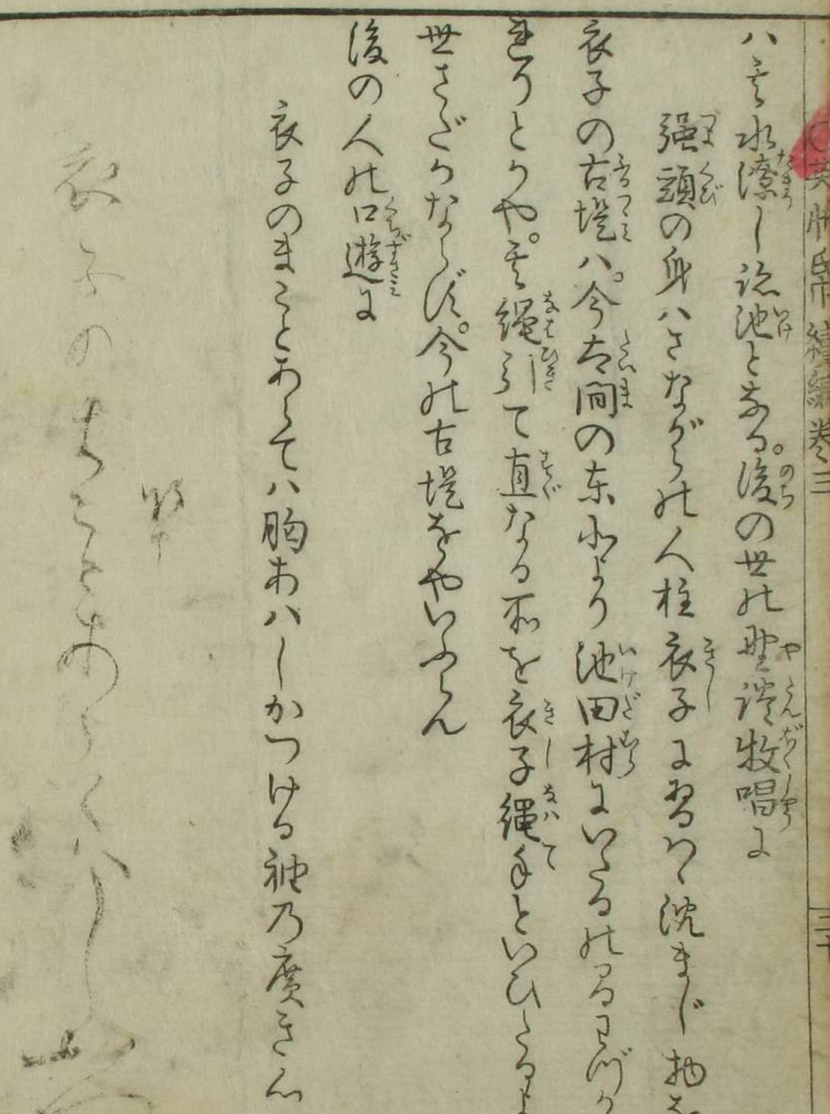
衣子の古塚ハ。今右同の東ゆゝう池田村よりるれるゝ川くよのこ

きろとうやゝ。を縄引て直なる石を衣子縄をといひゝるゝ。後

世さぐらなゝゞ。今れ古塚をやらうん

後の人れに遊よ

衣子のまゝとわゝてハ胸あハゝかつける袖乃度さんゝ



古今奇談莠句冊第三巻終